
記憶のないランナー

ピンプキン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶のないランナー

【Nコード】

N4346P

【作者名】

ピンプキン

【あらすじ】

何者かの策略によって記憶を失った少年、伊達信士はかすかに残っていた記憶を追いライバル、水時との戦いのために走る！
仲間との友情、様々な葛藤、そして自分の壁を乗り越えて、水時に勝つことが出来るか！

第1話・事件・

2017年6月

- 午前5時15分 -

少年は走っていた。

息を切らし、何本も何本も繰り返して坂を駆け上がる。

ここは「どんぐり沼」と言われる沼。

昔、ここで人が死んだという噂から誰も近寄らなくなっていた。

それでも少年はここにある長い坂道を好んで走っていた。

季節は6月も後半に入り、やっと暖かさが出てきた頃、

朝の空が明るくなるのも早くなり始めていた。

19本目を走り終え、坂を下り終えた瞬間、

「何者か」にいきなり頭部を鈍器のような物で殴られた。

クラッ

目の前がぼやけ、意識がもうろうとする。

その時、草の陰から数人がさらに出てきた。

数人は少年を殴る、蹴るなど

暴行を加えてきた。

少年は抵抗したが

人数には勝てず

遂に意識が途絶えてしまった。

「何者か」はそれを確認すると、

少年を沼に落とした…。

- 午前8時30分 -

「キンコンカーコンキンコンカーンコン」

2年2組の教室

（あーあ、あいつ遅刻かあ）

宮嶋 詩織はそんな事を思いながら席につく。

5分後

担任の九条先生が急いで教室に入ってきた。

九条先生は30代前半の若い先生で

陸上部の顧問をしている。

朝のホームルームに遅れるような先生ではなかったので、

（めずらしいな）

この時は、みんなこんなもんだった。

「悪い悪い、ちょっといろいろあつて遅れた」

「それでな、朝のホームルームの前にみんなに話ておかなきゃいけないことがある」

「今日、伊達が来てないんだが、実は」

「今日の朝早く、どنگり沼で伊達が溺れているのが発見された」

（えっ ？）

第2話・決意・

（えっ　　？）

教室が騒然とする。

「そ、そんな冗談だろ？」

新垣浩太が先生に信じられないといった様子で聞く。

浩太は陸上部で長距離をしており、伊達信士と仲が良かった

「本当の事だ。何故そうなったかは、分からないがアイツが自分で死のうなんて考えるはずがない」

「おそらく…なにかに巻き込まれたんだろう」

「だから、絶対にどنگり沼には近づくなよ」

「って言ってももう立ち入り禁止にはなってるんだろうけどな」

（信士がなんで　　）

教室はショックのまま朝のホームルームを終えた

「お疲れ様でしたー！」

陸上部の練習が終わり、みんながさっさと帰り始める中、

「先生」

伊達信士が話かけてきた。

「どうした？」

珍しく真面目な顔をしている。

「俺、長距離で走りたいです。」

「何でだ？お前なら2000でも充分やれるタイムだろ？」

「でも、どうしてもなんです！」

「分かった、お前のやりたい種目をやれ」

伊達はいつもの笑顔に戻り、

「はい、ありがとうございます？」

「ただし」

「ただし、条件がある」

「秋の新人戦までに、うちの長距離の奴ら全員抜かせ」

「本気ならこれぐらいのこと、だよな？」

もちろん本気で言っているわけではない。

どこまで本気で長距離をやろうとしているのか試してみた。

すると、伊達はさっきまでの笑顔と同じように笑顔を浮かべ、

「分かりました、やってやります」

そう言い切った。

「そうか…：そーいや最近野球のほうはどうなんだ？」

「絶好調っすよ」

「そうか、まあどっちも頑張れよ」

「はい、それじゃあそろそろ帰ります」

「おう、気をつけてな」

「信士ー！早くー！」

浩太が呼んでいる。

「おう！今行くよー？」

走っていく伊達

何故、長距離になろうと思ったのか
全く分からない。

でも、アイツの挑戦を見守ってやろう

そう思った。

第3話・傷跡・

・事件から3日後・

病室の前。ここは信士がいる病室である。詩織は病人の名前を確認し入ろうとした瞬間、

「ガラッ」

信士のお母さんが出てきた。

「あっこんにちは」

「あら、詩織ちゃん見舞い来てくれたの？」

「はい、あの…信士の様子は？」

「まだ、目を覚まさないの」

「そうなんですか」

「とりあえず病室入る？」

「はい」

入った瞬間、見た信士の姿は、

頭には包帯を巻き、顔にも痣があった。

「犯人は…捕まってるんですか？」

「警察の人が動いてくれてるんだけどね…」

（何で信士が…）

犯人にどうしようもない怒りがこみ上げてきた。

「なんで、信士はあの日どنگり沼に行ったんですか？」

「理由は分かんないんだけど、中総体が終わった辺りから急にランニングに行くようになってね、あの日も多分ランニングに行ったんだと思う」

「信士が、ランニングを…」

その後、たわいのない話を一通りし、

「ちょっと、売店で買うものあるから、信士見ててもらっていい？」

「あっはい」

（そっか、さっきは買い物に行くところだったんだ）

「じゃあおねがいねなんかあったら、連絡してちょうだい」

（どうして信士が…あの日、何があったんだろう？）

詩織は考えながら、信士を見ていると、

「ピクッ」

信士の手が動いた気がした。

「信士！？」

もう一度。

「ピクッ」

（今、確かに動いた！！）

「信士！信士！」

「うう…」

信士の目が開き始めた。

「信士！大丈夫！？」

信士は意識がもろろつとしたまま言った。

「あなたは…誰、ですか？」

第4話 - 沈黙 -

「ブウ〜ブウ〜」

ケータイが鳴った。

「はい？」

「詩織です……」

なぜか泣いている詩織の声。

「信士の意識が戻ったんです……でも、でも……記憶が……」

（信士の意識が戻った！？）

それを聞いた瞬間、信士の母、久美子には詩織が泣いていることも、言っていることもそれ以外どうでもよくなってしまった。

「ピッ！」

ケータイを切り、久美子は走り出した。

と、そこに丁度良く信士の担当をしている、鈴木先生がいた。

「先生！信士の意識が戻ったんです……！」

「はい、今インターホンから連絡がありました」

「急ぎましょう」

病室につくと

イスに座ったまま、手で顔を隠し泣いている詩織の姿があった。

それでも、久美子はただ、信士が目覚めたことだけが嬉しくてそれどころではなくなっていた。

「信士!!」

息子の名前を呼ぶ。

信士は今までとはまるで違う、うつろな目を久美子に向け、

「ここは、何処なんですか？」

明らかに今までの信士とは思えない口調。

「何故、僕は此処にいるんですか？」

久美子は言葉を失った。

「本当に…分からないのかい？」

鈴木先生が聞いた。

「はい…」

「この人達が、誰なのかも？」

信士は小さく頷いた。

「記憶喪失…」

鈴木先生が静かに呟いた。

「い、今なんて？」

「ちょっと、病室を出ましょう」

鈴木先生はドアを静かに閉め、言った。

「落ち着いて聞いて下さい。」

「信士君は…記憶喪失かと思われます。」

「その、記憶喪失がどれほどのものなのか今調べるので、ちょっと待っていて下さい。」

「そんな…記憶喪失なんて」

急なことに、戸惑う久美子とただ涙を流している詩織の間に沈黙が過ぎていった

第5話・意識・

「信士！信士！」

声が聞こえる。

しんじ？一体誰のことを言っているのだろうか？

目を少しずつ開けてみる。

その時、

「ズキッ」

体中が痛んだ。

分らない。何があつたのだろうか？

光が見え始め、目が慣れると白い天井が見えた。

と、視界に髪の毛の長い少女が飛び込んできた。

「信士！大丈夫！？」

ああ、信士ってぼくのことか。

「…あなたは誰ですか？」

聞いてみる。

少女は急にびっくりしたような悲しそうな顔をして、少し黙った。

少しの沈黙の後、

「本当に…分からないの？」

目にいっぱい涙を溜めて聞いてくる。

「…ごめんなさい」

少女の目から、涙がこぼれた。

泣いている少女の姿を見て、

何をすればいいのか分からなくなった。

そのまま、時間がたち、誰かが入ってきた。

おばさんと言えるような人と、優しい目が特徴的な白衣を着た男。

「信士!!」

おばさんが嬉しそうに言ってきた。

（この人なら何か分かるかもしれない）

「ここは何処なんですか？」

「何故、僕は此処にいるんですか？」

「本当に、分からないのかい？」

逆に聞かれた。

その後、意識がもうろつとするままいくつかの質問をされ、

3人は、病室を出て行った。

（何だっ てんだよ…）

天井を見たまま僕は悩んだ。

第6話・伊達信士・

すぐに、白衣の男は入ってきた。

「もう一度聞くんが、本当に何も分らないんだね？」

「はい…」

「君は3日前、どんぐり沼と呼ばれる沼で溺れているところを助けられたんだ」

「それで、この病院に運ばれてきた」

（溺れていた？なんで？）

「そついや君は名前も覚えていないんだっただね」

「君は『伊達信士』13歳の中学二年生」

「ここまで何か覚えていることは？」

首を横に振る。

「はっきりした理由は分からないが、君はおそらく記憶喪失だ」

（記憶…喪失　？）

「あ、あの、さっきの人達は？」

「君のお母さんとクラスメイトの詩織ちゃんだよ」

「そうですか…」

「まっとりあえず今日はこれぐらいにして、悪いけど明日からもつと詳しい検査をさせてもらうよ」

「今日は、あと寝た方がいいな」

「あ！そうだ言い忘れてたけどぼくは担当の鈴木」

「じゃあよろしく」

そう言い残し、鈴木先生は病室を出て行った。

病室が静かになる。

（伊達…信士…僕は一体何者なんだろう？）

（何故、沼に？）

何も思い出せないまま考えていると、自然とまぶたが閉じ、

眠りについた。

次の日からは鈴木先生の言う通り、いろんな検査をされ、

MRIや何を覚えていて、何を思い出せないのかもさんざんながら

いに質問攻めにあつた。

物の名前や使い方などは覚えていたが、自分や人のことについては何にも分からなかった。

「うーん、覚えていないのは、過去の自分に関係がある事だけ、か」

「まあ地道に思い出すしかないな」

「これからはなるべく多く、過去の君に関係のある人にあつてもらう」

「その時に何か思い出せばいいんだけど」

「オレに、関係のある人…ですか？」

「うん、君は学校では陸上部、他には野球をしていたらしいから」

「これからはそうゆう人達に来てもらう」

（人に…会うのか…）

「その人達は…どんな顔をしますかね…」

あの、涙を流す少女の顔が浮かぶ。

「…簡単には、受け止められないかもしれないね」

「でも、早く記憶を取り戻さないと」

「自分のためにも、その人達のためにも…」

第7話・記憶・

（自分と周りの人のために、か）

自分の母親の顔さえ、覚えていなかった。

さらには、自分の事も。

自分の事を知らないのは恐ろしい。

まさか、自分は極悪人だったんじゃないか、だからこんな事になったんじゃないか、

そう、自分を不安になる。

（もっと自分を知ろう、人に会って僕を教えてもらうんだ）

会う人を傷つけてしまいかもしれない、あの少女のような思いをさせてしまう。

それでも、鈴木先生の言うとおり、早く記憶を取り戻すことが本当にその人達のためなのなら…。

「今日、あの『詩織ちゃん』で子と君の担任の先生が来るから」

「いろいろ聞くといい」

「はい」

（あの少女が来るのか…あれから5日経つけど気持ちは落ち着いたかな）

「ガラ」

「失礼します」

「詩織」という人といっしょに入ってきたのは、予想していたよりも若い男の人だった。

（この人が、先生か）

「この間は、ごめんね」

「信士が記憶喪失になったって思うとパニックっちゃって」

詩織が謝ってきた。

「でも、もう大丈夫だから何でも聞いて」

「あ、ありがとう」

「まず、私の名前は宮島詩織、信士とは幼なじみで同じクラス、陸上部なの」

「で、この人が私達の担任の先生で陸上部、顧問の九条先生」

「やっぱり、覚えてないか？」

「…はい、すいません」

「…まあしょうがないさ、オレの分かることなら答えるから、何でも聞いてくれ」

「じゃあ…僕は陸上部だと聞いたけど、種目はなんなんですか？」

「200メートルだよ」

詩織が答えた。

「や、違う長距離だ」

今度は九条先生が言った。

「え？何言ってるんですか、信士は200じゃないですか、中総体でも200で走って…」

「それまではな、信士、お前は2週間ほど前、俺に突然、長距離をやりたいと言ってきた」

「覚えてないか？」

「分かりません…あの、その理由って？」

「や、それは俺も分かんないんだ」

「なるほど、じゃあ僕の友人関係は？」

「信士は陸上部の人みんなと仲が良かったよ」

と、詩織が言う。

「あつそれと、さっき私と信士は幼なじみだって言ったけど、もう一人いるんだ」

「水時 走っていう…」

その瞬間、

（水時 走 ？）

「うあああああ！！」

「信士！大丈夫！？」

「おい、信士！！」

「 走 勝つ 絶対に 」

第8話・約束・

「走 勝つ 絶対」

「勝つんだ オレは」

頭を抱えたまま、何かにうなだれている信士。

目の前で起きている事に、詩織はどうすればいいのかわからなくな
ってしまった。

「し、信士？」

「ピピピピッ！」

と、九条先生がインターホンを急いで押し、

ようやく、鈴木先生が来た。

「うう 勝つ 勝つ」

まだ、うなだれている様子の信士。

「すみませんが一旦病室を出てもらっていいですか？」

鈴木先生と一緒に来た、別の先生に言われ、病室を出た。

「オレ、お前らと同じ中学校行けないんだ」

走は小学校が終わりに近づく頃、突然信士と私に言った。

「何言ってるんだよ、お前、受験でもしたっけ？」

信士が普通のふりをして言う。

「オレんち、学区が違っんだ」

「だから、隣町の北星中学校……」

「お前らと同じ、鷹谷中には行けない」

「」

私も信士も黙った。

走が「嘘だよ」と言うのを待って。

「そうゆうことだから」

歩いていく走。

私達は何の言葉もかけることも出来ず、ただ走の背中を見送るしかなかった……。

そのまま迎えてしまった卒業式の日、気まずい帰り道の中、信士は言った。

「お前、陸上部に入るんだろ？」

「あ、ああ」

「オレも陸上やるから！だから…だから、そんな時はライバルとして…」

「また、会おうよ！！」

少し、驚いた様子の走は目に涙を溜めて、

「ああ、約束な！」

そんな事があって3人は陸上部に入った。

二年生になった中総体、その日見た水時 走の姿は…、

男子1500メートル、二年生にして市の大会で一位を取っている
とんでもない走りだった。

詩織は先生に送られる車の中で、思った。

まさか

まさか、信士は走に勝つために長距離になったんじゃない

信士は「勝つ」と言っていた。

間違いない、信士は本気だったんだ。

「
」

複雑な思いを抱え、詩織は薄く涙が零れた。

第9話・理由・

（水時 走…）

僕はどうして、そいつに勝ちたいと思ったんだろう？

水時「勝ちたい

という気持ちしか、僕には思い出せなかった。

勝ちたい？

なにでだ？どうして？

そっぴや、詩織は幼なじみって言ってたっけ。

水時とは何者なんだ？

「そろそろ落ち着いた？」

と、鈴木先生が入ってきた。

「はい…なんかすいませんでした」

「や、気にしないでいいよ、こうやって一つずつ記憶を取り戻して

いく事が大事なんだから」

「ところでなんの記憶を思い出したの？」

「ええっと詩織が水時 走ていう名前を言った瞬間、頭ん中に何か
が飛び込んできたような感じになって…」

「なるほど…あの反応からだ、よっぽど大事な記憶だったんだと
思うんだ」

「その、水時 走ってという子は君にとってよほど重要な人物なんじ
やないかな？」

「あの…もう一度、詩織に会って話を聞いていいですか？」

「ああいいよ、本人ももう少し話す事があったみたいだしね」

「あ！あと君が行っていた、野球チームの人にも来てもらうから」

「じゃあ、明日な」

「ガラッ!!」

「信士!!」

背の小さめな少年が飛び込んできた。

「ちょっと！コート!!」

と、慌てて詩織も病室に入ってきた。

「信士、この人新垣浩太っていうの」

「やつは覚えてない？」

「おい！信士、オレだぜ！！覚えてるよな！？」

「…悪い、覚えてない」

「なっ」

「コータはね、陸上部で長距離をしてて、信士とはいつも一緒にいたんだよ」

（長距離　！？）

「なあ？水時の事もっと教えてもらえる？」

「水時ってあの、今回の中総体で一位だった奴！？」

浩太が驚いたように言う。

「中総体で一位？」

「ああ、そудだよ水時　走は市の大会で1500メートルにでて、一位だったんだ」

「1500メートル　！？」

あっ

そうか、そうだったんだ…

「だから、僕は長距離になるって言ったんだね？」

浩太ははあ？という顔をしている。

が、詩織には意味が通じたらしく、

黙って頷いた。

第10話・変わらないもの

「走と信士はね、約束したの」

「陸上でライバルとしてまた会おうって」

「でも、信士は野球に夢中になりすぎちゃって…」

「約束がどうしてもよくなってしまっていたってこと？」

「…でも、中総体が終わってすぐ、長距離になるって言ったってことは約束を叶えようと思ったってことでしょ？」

「なるほど……じゃあ水時はそれ程凄い走りをしてたってことだね」

「ここでも詩織は黙って頷いた。

「私も、見た瞬間びっくりした、小学校の時から速い方ではあったけど、」

「あんなに速いのは…」

「良かったよ」

「えっ？」

「退院したときにやることが決まって」

「やることつて、1500を走るってこと。」

「違うよ、水時に勝つってこと」

「なっ!？」

詩織も浩太も信士の衝撃的な言葉に、声が出なかった。

「そんなの、無理だよ……」

詩織がうつむいて言った。

「信士は走の走りを覚えてないから、そんな事言えるんだよ……」

「関係ない!」

「過去の僕だつて、その水時の走りを見たって『勝つ』って本気で思ったんだ」

「だから、僕はその気持ちを貫く!」

「ただ、それだけなんだよ」

(!)

「…退院したら、地獄だよ」

「分かってるよ」

(…まったく)

「やっぱ、信士は信士のままだな」

浩太が笑いながら言う。

「オレも長距離だから、一緒に頑張ろうぜ」

「うん」

と、その時だった。

「信士!!」

体の大きな、少し大人びた青年と呼べるような男が入ってきた。

「オレだ、郷田洋介だよ!」

「…やっぱ、覚えてないのか?」

「うん、悪いけど…」

「そっか…オレはお前のキャッチャーしてたんだ」

(…キャッチャー?)

「ってことは、君が野球のチームメイト?」

「ああ、早く記憶取り戻してまた、一緒に野球しようぜ」

第11話・ふたつの道・

「じゃあ、話してもらっていい？」

「野球の時の僕について」

「ああ、いいよ」

「じゃあ、私達はそろそろ帰るね」

「うん、ありがとう」

「さて、じゃあ話すぞ」

「お前は、ピッチャーなんだ」

「へえピッチャーを？」

「うちのチームは、結構名門な感じなんだ、そんな中でもお前が次期エースってこと」

「で、オレがその女房役だったんだ」

「いきなり、次期エースって言われてもね……」

「お前は、本当に凄かったんだ」

洋介が急に真面目な顔をして言った。

「この前の地区大会の決勝戦、お前は五回にピンチの場面で登板したんだ」

「点差は1点、ツアウト満塁のピンチでバッターは四番」

「お前とオレはその場面で出たんだ」

「…結果は？」

洋介が間を開けてきた。

「覚えてないのか？」

じつと、こっちを見つめて聞いてくる。

「…うん」

「そうか」

洋介は顔に出やすいタイプらしく、残念だったのがよく分かった。

「勝ったよ」

「お前はあの場面で、四番を三振にとってみせたんだ」

「そう…なのか…」

思い出せない。

大切な思い出のはずなのに、野球に関してのことは何も分からなかった。

やっぱり、水時っていうのはよほど凄い存在だったんだ

「悪い、何にも思い出せないや」

「そうか…」

洋介は悲しいとか、そうゆうんじゃないく、『悔しい』というような顔をしていた。

「…なあ、もう一度グラウンドに戻ってきてくれよ」

「お前がいなきゃ、無理なんだよ…」

「……」

その日の夜

（僕は、何を望むんだろう？）

そのまま、野球をしていれば、それなりにいい成績を残せるんだろう。

でも、それじゃあ水時には勝てない。

僕が進むべき道は、一つだ。

答えは出ないまま、眠りについた。

第12話・再会・

「よしっ体の傷もほとんど消えたし、後は記憶だけ、だな」

鈴木先生が言った。

「…あのさ、体の痛みが完全に消えたら、一旦退院したほうがいいんじゃないかと思うんだ」

「いつもの生活をする事で、何か思い出せるかもしれないし」

「なるほど…」

「まあ、それはもうちょい相談してからの話だけだな」

「ところで、今日来るぞ」

「来るって、誰がですか？」

「水時 走ってやつだよ」

（！…）

「本当ですか！？」

「うん、なんか思い出せるといいな」

（水時が…来る！）

少年は静かにドアを開けた。

「よう」

身長は170センチぐらい、細身だけどがっちりした体つきをしている。

「…君が、水時？」

「ああ、そうだよ」

水時の鋭い視線と、重なった。

「ゴクッ」

「記憶喪失つてのは、本当の事だったんだな」

「ああ…」

「水時の事は、みんなから聞いたよ、1500メートル一位」

「市の大会じゃ周りがザコ過ぎるんだ、だからそんなもん何でもない」

（……………！）

「…ぼくが『そんなもん』じゃなくするよ」

「お前じゃ無理だ、だいたい短距離だろ、お前」

「『約束』なんだろう？」

水時は黙った。

「ぼくは、もう長距離なんだ、それに」

「覚えてた」

「お前には、絶対勝つんだって…」

「お前は一回、約束の事なんて忘れただろが」

「そう…らしい…でも、この感覚は本物なんだ」

「多分、お前の走りを見たから！」

「だから…」

「ふん」

「まあ何だろうと、結局は勝てないよ」

そう言い、水時は立ち上がった。

「ランニングの時間なんだ、帰る」

そして、病室を出る所で水時は不敵な笑みを浮かべ言った。

「まあ、楽しみにしとくよ…」

「ああ、見とけ」

第13話・ランニング・

「…ハア…ハア」

暗い夜道を街灯が照らし出す。

人通りが少なく、信号がほとんどない道、水時のいつものランニングコースだ。

水時はいつも、一周5キロあるこのコースを1日に朝と夕方の2回走っていた。

「フウッ」

いつものように、最後の長い坂道にさしかかった。

水時はその坂を一気に駆け上がる。

と、登り終えたところに詩織がいた。

「何しに来たんだよ」

息を整え、軽くストレッチをしながら聞いた。

「別に、ただ昨日言っただよに信士に会いに行ってくれたかなと思っ
て」

前日、詩織は信士に会いに行くように、水時に頼んでいた。

「ああ、行つたよ」

「それで、信士は何か思い出した？」

「なんにも、でも」

「アイツ、俺と競うつもりらしい」

「競うどころか、勝つつもりらしいよ」

「ふつ、まあ無理には変わらないさ」

「どうかな？」

詩織が楽しそうな顔をして言った。

「俺は、絶対に負けないんだ…」

「そう、じゃあ帰る」

「ランニング中、失礼しました」

そう言い残し、詩織は行ってしまった。

（俺は、負けない…）

「あの日」のことが目の前に浮かんた。

（絶対に戻らない、あの日のようには…）

水時はまた、走り出した。

次の日

「野球を辞める!？」

この日、見舞いに來ていた、洋介に陸上に専念すると伝えた。

「ふざけんな!絶対に納得しないからな!」

「どうしても、勝たなきゃいけない奴がいるんだよ…!」

「だからってなんだよ!いいか、お前には才能があるんだ!」

「野球は辞めちゃ、駄目なんだよ!」

第14話・転機の訪れ・

「野球は辞めちゃ、駄目なんだよ！」

「…才能とか、そんなんじゃないんだよ」

「…とにかく！もつと考えてくれ！」

「…分かった、考えてみるよ」

「伊達君、退院決まったぞ」

「本当ですか！？」

「うん、出来れば3日後で考えてるんだけど」

「学校の事とかは、九条先生にお願いしたし、あとは君さえよければ3日後で」

「もちろんです！是非、退院させて下さい」

「分かった、ただなんかあったらすぐ病院に来るんだぞ」

「はい」

「あと…もう一つ」

「なるべく、身のまわりには気をつけて生活するように」

「例の『事件』はまだ解決してないんだ、実は君には知らせてなかったけど、毎日警察の人が事情聴取に来てたんだ」

「それは、全部君のお母さんが受けてくれてた」

「…そうだったんですか」

「ああ、お母さんに感謝しとけよ」

「はい…あの、明日その警察の人に会ってみていいですか？」

「事件のことについて、聞きたいんです」

「うーん…分かった、ただし念の為僕がついてるのが条件でなら」

「はい、ありがとうございます」

（やっと、やっと事件について触れられる）

「はじめまして、信士君」

「刑事の永井です」

「どうも」

見た目は、若い男の人だった。

「早速だけど、君は記憶喪失ということなんだよね？」

「はい…」

「それで、事件に関して少しでも覚えてることはないかな？」

「いえ…事件に関しては何にも覚えてなかったです」

「何にも…」

悔しそうな、永井さん。

「ぼくは今日、逆に教えてもらったために入ってもらったんです」

「お願いします、事件について、話してもらえますか？」

「…分かった、今のところ調べのついている分を話すよ」

ぼくは、体を強ばらせ永井さんの話を聞き始めた。

第15話・ブラックバード・

「6月25日、発見された時間が7時45分」

（……？）

「君が事件に巻き込まれた日だ」

「どんぐり沼と呼ばれる沼があるんだが、そこで君が溺れているのが発見された」

「…なんで？」

「君のお母さんの話だと、君は朝早くランニングに出ていたそうだ」

（　　水時に勝つために…）

「…犯人は　？」

「すまない…まだ、捕まっていないんだ」

「でも、目星はだいたいついてる」

目星がついている？

なら、何故捕まっていんだ？

「ここら辺で、麻薬の取引を多くしているヤクザグループがあるん

だ
」

「前から、警察でもそのグループを捕まえようと、必死に捜しているんだが、なかなか尻尾を掴めないでいる」

「それがなにか、関係あるんですか？」

「事件現場にはわずかだが、少量の覚せい剤が見つかったんだ」

（ ）

「ここからは僕の勝手な仮説だが」

「あの日、君はランニング中、そのグループが覚せい剤を使用または取引しているところに出くわし、口封じの為に襲われた」

「 」

本当にそうなら、ぼくはとんでもない事に巻き込まれたんじゃない。

「……どنگり沼は昔、人が死んだという噂からめったに人が通らない沼らしい」

「覚せい剤を使うには丁度いい場所だ……」

「……そのグループってのは？」

「……何も分かっていないんだ、毎回警察が動く時にはいつも遅い」

「ただ、警察の間では、『ブラックバード』と呼ばれているんだ」

「悪いな、全然力になれなくて」

「でも、絶対に犯人を捕まえてみせるから」

永井さんの言葉とは裏腹に、信士の心の中は不安でいっぱいだった。

でも、

でも、水時に勝つにはまず、退院は絶対にしなくちゃいけない。

「永井さん、鈴木先生も」

「ぼくは、大丈夫です、だから退院は絶対にします」

「あ、ああ」

事件は、ぼくが思っているよりも深刻で残酷なものだった。

第16話 - 退院 -

「こんにちは」

鈴木先生と退院の事について話し合っていたところに、詩織と九条先生が訪ねて来た。

「はい、新しい小説」

詩織は毎回、暇つぶしになるようにと、小説を持ってきてくれていた。

「あ、いや今回はもう、いいんだ」

「え、なんで？」

差し出した小説をしまいながら、聞いてきた。

「突然だけど、明日退院出来ることになったんだ」

「本当に!？」

詩織は本当に嬉しそうな顔をしている。

ふと、『ブラックバード』の事が頭をよぎった。
まさか、ないとは思っても退院した時また、狙われるんじゃないかと。

その時、詩織や水時、ぼくの周りの人達が危険な目にあったりしてしまっんじゃないか、と。

「良かった…本当に良かった」

「ちよつ、泣くなよ」

「だって、だって…」

こんなに喜んでくれる人がいるんだ。
だからこそ、迷惑だけはかけたくない。

「それで、九条先生にお話しがあつたんです」

鈴木先生が口を開いた。

「なんででしょう？」

「退院してからの部活動のことなんですが、いつ頃から伊達君を入れてもらえますか？」

「ああそうですね…丁度、夏休みに入るところなので…」

「じゃあ是非、夏休みからで！」

信士が言った。

少しでも、早く練習がしたい！

「…本人はこう言ってますけど大丈夫ですか？」

鈴木先生も聞いてくれた。

「うん、分かった！」

「ありがとうございます！！」

「じゃあ、明日また来るから」

「うん」

・退院当日・

この日は、詩織に浩太、九条先生も来てくれた。

「鈴木先生、本当にありがとうございました！」

「いや、またなんかあったらすぐに来るんだぞ」

「はい！」

「じゃあ、そろそろ行くよ」

母さんが言った。

と、その時

「信士!!」

洋介が息を切らして、走ってきた。

第17話・投げる・

「はあ…はあ…」

「なんで、洋介が…？」

「僕が呼んだんだ」

鈴木先生が言った。

「伊達君、退院の前にキッチンとはつきりさせておくのが大事なんじゃないかな」

「…」

「…洋介、ぼくはやっぱり」

「信士」

洋介は真面目な顔をしている。

「俺は、お前に才能があるから、と言った」

「今でもそれは、変わらない」

「だから、それは…」

「でも、違った」

「俺はただ、ずっと信士の球を受け続けていたかったただけなんだ」

「」

そして、洋介はグローブを信士に差し出し、言った。

「少しでいい、投げてくれないか？」

信士は戸惑った。

「投げるよ」

浩太が笑顔で言った。

「そいつが受けたいって言ってんだから、投げてやりゃあいいじゃん」

「…分かった、投げるよ」

「ありがとう…」

・近くの公園・

これが野球ボールか、きれいな球型で硬く当たったら痛そうだった。

シュッ

「バシッ」

洋介のミットがいい音を出した。

体の痛みは、もう無い。

投げ方は覚えてなかったが、ボールを思いっきり投げる。

「そろそろ、座るぞ」

信士は頷いた。

「バシッ」「バシッ」

一球一球を洋介は大事に取ってくれているのが分かった。

何球投げた頃だろうか、洋介が突然言った。

「信士、ブレイクボール投げてくれ…」

（ブレイクボール…？）

「ドクン」

心臓が脈打った。

ドクッ

ドクッ、ドクッ、ドクッ

信士は大きく振りかぶり、洋介のミットに思いっきり投げ込んだ。

第18話 - 気迫 - (前書き)

すいません？

軽く脱線してます

第18話 - 気迫 -

県大会決勝、うちと相手チームはお互い譲らぬ攻防だった。

3対2、一点リードで迎えた5回、

エースの隆也さんがついに捕まり、ワンアウト満塁の大ピンチとなった。

隆也さんは3番バッターに思い切り投げ込んだ。

その時、

「カキーン!!」

打球は真っ直ぐ、隆也さんへ。

（危ない!!）

「バシッ」

隆也さんは無理やり、素手で打球を止めた。

「くっ!!」

打球が落ちたのを見て、ランナーが一斉に走り出した。

「オラア!!」

ボールを鷲掴みし、腕を強引に振って投げた。

「アウトッ!!」

間一髪のタイミングはアウトだった。

(ふう…)

しかし、

「うう」

腕を押さえ、うずくまる隆也さん。

「た、隆也!?!」

タイムをかけ、選手が隆也さんの周りに集まる。

「隆也!」

監督が隆也さんのもとに駆け寄った。

「くっ、監督すんません…」

「…良くやった、後は休んでおけ」

「信士、洋介行くぞ!!」

「は、はい!!」

マウンドに着くと、信士は隆也さんからボールを受け取った。

「信士、後は頼んだ!!」

隆也さんの手は震えている。

「…任せて下さい」

選手は守備に戻り、監督と隆也さんはベンチに戻った。

「洋」

「ん？」

「ぜってえ抑えるぞ、隆也さんの為にも勝つんだ」

「ああ!!」

バッターは4番。

ここまで2打席とも、ヒットを放っていた。

（初球、直球行くぞ!）

信士は頷き、一球目を投げた。

「バンッ!!」

（…!!）

凄い球だった。

今まで見たことがないくらいに、威力のある球。

（いける！！この球なら、やっぱり信士は最高だ！！）

2球目はボール。

3球目、

「カキーン！！」

（えっ ？）

第19話・ありがとう・

「カキーン!!」

ボールはボールすれすれを通過した。

「ファール、ファール!!」

（あ、あぶねえ）

「タ、タイムお願いします」

「信士、なに投げたい!？」

（直球は今打たれたし、並みの変化球じゃ打ち取れない）

「分かってんだろ？」

信士はニヤリとして、言った。

「ブレイク行くぞ」

ブレイクは信士のオリジナル変化球で、打者の手元で急に斜めに落下するように曲がる球だった。

まず、打たれるはずのない球。
でも、あまりの難しさから2球に1球は甘くなってしまつ代物だっ

た。

「やるしかねえ」

ツーストライク、ワンボール。

構えたコースはど真ん中、信士は思いっきり投げ込んできた。

ど真ん中にボールが来る。

バッターはホームランを確信したようにバットを振った。

しかし、バットに当たる筈の瞬間、バッターの視界からボールが消え、

見事に洋介のミットにボールは収まった。

ブレイクボールとは、このときの変化球だった。

洋介は受けているうちにどうしても、あの球が捕りたくてしょうがなくなつた。

あのときの興奮を取り戻したくて。

「信士、ブレイクボール投げしてくれ……」

少し、間があり信士は振りかぶった。

そして、放たれたボールはど真ん中へ、洋介は不思議とボールが曲がる方向へと手が伸びていた。

クッ

ボールはあの日と全く同じ軌道を描き、洋介のミットに収まった。

(……)

「…じゃあな」

信士は急にマウンドを降り、背中を向けて言った。

洋介はこのとき、初めて分かった。

信士は信士のまま、陸上へと自ら道を選んだんだ。

記憶が無かろうと、信士は信士だった。

「ありがとう…」

涙をこらえながら、

背中を向けて歩き出した少年にかすれた声で呟いた。

第20話・夏の訪れ・

「ガラッ」

カーテンを開けると、眩しい光が一斉に入ってきた。

「はあゝああ」

大きなあくびをした後、昨日の事を思い出した。

あの時、どう持って投げるのかも分からなかったのに、確かにあの球だった。

あの一瞬だけの感覚。

記憶は戻ってないのに体が勝手に動いた、不思議な事だけど、鈴木先生に話したら多分また、入院させられる。

…黙っておこう。

学校は今日まであるって詩織が言ってたっけ。

まっ、とりあえずランニングにでも行こう。

（ってそっぴや道分かんないや）

とりあえず信士は、走りながら近場の道を見てもうことにした。

いろんなことが見えてくる。

ん？

あれは、確か鷹谷中の制服。

あつちは気づいたらしく、こっちに走ってきた。

「先輩！退院出来たんですか！？」

茶髪で背の小さい少女。

「…ごめん、悪いんだけどさ、記憶が無いんだ」

「あつ…そうでした…」

「すみません、先生からは聞いてたんですけど、先輩見たら飛んじやって…」

少女は俯いた。

と、すぐに上を向き、

「私、福崎夕子って言っんです」

「一応、陸上部でハードルをしてるんですよ」

（陸上部…！）

それでも、信士はそんなことよりも何故、夕子がこんな所を歩いているのが気になった。

確か、家を出たのが10時頃、有り得ない時間だったからだ。

「それよりも、なんでこんな時間に…」

聞こうとしたとき、

「先輩は、なんでこんな所歩いてたんですか？」

質問を急に返された。

「えっ… ああ、道を何とか覚えようと思って」

「それなら！」

「それなら、私が道案内します！」

夕子は信士の手を引っ張り、歩き出した。

「ちょ、学校は！？」

「そんなの、いいですから！！」

結局、夕子にこの町の道案内をされる事になった。

第21話 - え? -

「それじゃまず、どこ行きましょうか?」

「いや…ぼくは分かんないし、任せるよ」

正直、夕子の異常なテンションにはついていけなかった。

「了解です!なんか気になるのがあったら、何でも言っして下さい」

「あつ!…ちよつと待つて、1カ所だけ行きたい場所があるんだ」

「なんか、思い出しましたか?」

「いや、全然」

信士が来たかったのは、どんぐり沼だった。

入り口には立ち入り禁止のテープが貼ってあり、さすがに入れなかったが、中は充分見る事が出来た。

(ぼくは、ここで)

沼には、なかなか急な坂があり、自分はそこを走っていたのだろうという、憶測は立てられた。

「……………」

黙って沼を見ている信士の姿を、夕子は見つめていた。

その後、馴染みのスーパーや小学校、地域の広い公園などいろんな所に行ってみたが結局、何も思い出せないままだった。

「最後に中学校にだけ行っていい？」

「別にいいですけど…」

「恥ずかしい話さ、ぼく明日から、部活に行くくせに、道分かんないんだ」

「じゃあ、行きましょう」

「私も部活には、出る気でしたし」

「ありがとう…」

午後2時、7月でこの時間帯はとにかく暑く、動かなくても汗が出てくるほどだった。

グラウンドにはたくさんの中学生で賑わっている。

でも、信士の目に映っていたのは、ひたすらに走る中学生達の姿だけだった。

「なかなか、テキパキしてるでしょ？」

夕子が口を開いた。

「あ、ああ」

「新しく部長になった、市原 哲先輩の力です」

「へえ…」

夕子は急に立ち上がり、

「じゃ、私もそろそろ行きますね」

「あ、今日は本当にありがとう…助かったよ」

「いえ、そういや一つだけ言い忘れてたことがあるんです」

「？」

夕子は急に小声になり、言った。

「実は私達、付き合ってたんです」

「は？」

「そんじゃっさよなら」

走っていく、夕子。

（え、ええーーーーーっ!!）

第22話・スタート・

ドキッ

心の中がうずく。

あれが本当のことなら、ぼくは夕子にとっても悪いことをしてしまった。

ふと、時計をしてみる。

午前3時、なぜか眠れなくてしょうがなかった。

「今日から、再び部活に伊達が参加することになった、しかし、前にも言ったように記憶がないからそこら辺は気い使ってやれよ」

九条先生が部員を集め、言った。

「よろしくお願いします」

続けて、ぼくも頭を下げた。

「あと、伊達は長距離として、加わることになったから、そこんとこよろしく」

「じゃあ、後は市原、いつものように頼む」

「はい、よしジョックいくぞ！」

「はい!!」

「ほら、いくぞ」

信士のもとに、詩織と浩太が来てくれた。

「うん」

「次、ブロック!!」

（？）

「信士、こっちだ」

浩太が呼んでくれた。

「先生、信士連れてっていいっすよね？」

「ああちょっと待て」

九条先生も来た。

「今日の練習は外周だ、伊達はついてけるとこまでついててみる」

「はい」

「よい、スタート」

浩太の合図と共に、長距離5人は一斉にスタートした。

「ハア…ハア…」

5周目を過ぎ、信士の呼吸が乱れてきた。

それに比べ、他の4人には疲れている気配がない。

そんな状態に気づいたのか、

「大丈夫か？」

と、浩太は心配してくれている。

ぼくは、声が出せず頷くのが精一杯だった。

「信士、少し上げるぞ」

7周目に入ったところで浩太はスピードを上げた。

「ハア、ハア、ハア」

わき腹は痛み、喉が切れそうなほど、呼吸は苦しい。

「OK 終わり」

10周を走り終え、信士は地面にへたり込んだ。

「大丈夫か、信士？」

浩太はまだ余裕があるようだ。

「先生、終わりました」

「そうか、お疲れさん、信士はついてこれたのか？」

「はい、今ここで死んでますけど」

それほど、信士にはきつかった。

「…分かった、お前らはクールダウン行ってこい」

「伊達はあと、休んどけ」

「はい…」

でも、5分後

「回復しました」

「いや、まだ休んどけって」

「大丈夫です」

しかし、信士の顔つきは、完全に回復していた。

（ ）

「お前んちに水着あるか？」

「え？ああ、あつたと思いますけど…」

「じゃあ、明日から泳げ」

「は？」

「だから、明日からお前の練習は水泳だ」

第23話・謎（なぞ）・

息が苦しい。

さつきから、ずっと泳ぎっぱなしだからだ。

1日、3000メートルを泳ぐこと、九条先生に言われたぼくの別メニュー。

それも、3日目になるとますますキツくなってくる。

「おーやってるな」

たまに、先生の目を盗んでは浩太が様子を見にくる。

「ああ、やっと2000終わったよ」

「…俺らよりキツいんじゃないか？」

「かもね」

水泳で肺が強くなるとかなんとか、聞いた事はあつたが、みんなが走ってる中、自分だけが泳いでいるというのはなんとなくいやだった。

「じゃあ、あと1000、行ってきます」

「行つてらっしゃい」

「あ、そうだ」

「あのさ浩太、ぼくって…」

「？」

「…やつ、やっぱりなんでもない」

夕子について、聞きたかった。

それ以前に、ぼくには彼女がいたか？と。

入院中、詩織も浩太も彼女について一言も喋っていなかった。

それが、いきなりの告白。

疑って当然だった。

「先輩、お疲れです」

プールから上がったぼくに、人目を気にするようにして、夕子が言った。

「う、うん…」

「先輩、今日一緒に帰りましょ」

「いや、浩太達と帰るから…」

「ええ、先輩冷たいです、前にも言ったように私達、付き合ってたんですよ？」

「明日は、絶対ですからね」

「…分かった」

どうしても彼女がいたという、確証が持てなかった。

「薬物乱用者確保!!」

捕まっているのは、高校生。

「なぜ、こんなもの使った!？」

「……」

「おい!!聞いてんのか!？」

「……」

「お前、ブラックバードには関係あるのか？」

「……ブラックバード?なんだそりゃ」

「俺は、」

「俺は、『Crow』に入りたくて、ヤクを使った」

（Crow……?）

「おい、なんだC r o wってなんか知ってんのか!？」

「知らねえよ、ただC r o wってのは」

「俺らみたいな、学生の集まりだ」

第24話・Crow・

「先輩、今日こそは一緒に帰ってくれるんですよね?」

帰り、夕子に呼び止められた。

「…分かってる」

「信士へ帰ろうぜ」

浩太と詩織がいつものように来た。

「ごめん、今日ちょっと用事あるんだ」

「そっか…分かった、じゃあな」

(……………)

「先輩、行きましょっ」

「ああ」

「……………」

帰り道、夕子は楽しそうにずっと喋っている。

この笑顔を見ていると、彼女だったというのも本当だったんじゃないかと思えてくる。

「で」

「あ、んじゃ家こつちだから」

「はい、じゃあまた明日」

「おう」

「……………」

信士はドアに手をかけた。
が、突然振り向き、

「…バレてるよ」

「あ、やっぱり?」

ものの陰から、詩織と浩太が出てきた。

「や、詩織がさ、信士の様子がなんかおかしいって言ってたもんだから」

「付いてきちゃった」

「なるほど…」

信士は思い切って聞いてみることにした。

「ぼくにさ、彼女っていた？」

「どうゆう意味？」

「いや、だからさ……」

信士は今までのことを話した。

「…へえ、そんな事があつたの」

「んで、どっちなの？」

「信士にはね……」

詩織が言いかけた瞬間、

「ガチャッ」

ドアが開き、久美子が出てきた。

「あつ、信士早く入んなさい」

信士を引っ張る、久美子。

「え、あつ、ちよつ、ごめんっ！また、今度！！」

詩織と浩太は呆然と見送った。

「すいませーん、今帰りました」

母さんが、話した相手は永井さんだった。

「ど、どーも」

「早速だけど信士君、ブラックバード…いや、『Crow』について新しい情報が入った」

（……Crow?）

「新しい情報によると、Crowは学生が集ってできた組織らしい」

「が、学生!？」

「ああ、これから先、何があってもおかしくない」

「そこで、君を預かりに来た」

「何言ってますか…?」

「安全の為だ」

「…嫌です!!」

（……………!）

「君は、奴らに命を狙われるかもしれない……」

第25話・ぼくの過去・

「んなこと前からじゃないですか!」

「ちがう…」

「奴らは、そんなレベルじゃない」

「どうゆう、ことですか?」

心臓が脈打つ。

「君にはこないだのことを全部話そう」

薬物所持で捕ま

えたのは、この近くにある高校の生徒だった。

「Crowってのは、俺らみたいな、学生の集まりだ」

「な、何を言っている、わけの分からんことを言っな!」

「これだから、大人は……………」

その瞬間、

「か、神!」

高校生は何故か急に、道路の方へ走り出した。

「キイイイツー!!」

しかし、走ってきた車にはねられ、高校生は道路の上に倒れた。

「お、おい!」

慌てて、高校生のもとに警察官が駆けつける。

「う、うう………」

まだ、意識はあるようだ。

「神…何故…?俺はあなたの言うとおりに………」

道路の反対側を向いたまま言い、そのまま高校生の意識が途絶えた……。

「げ、幻覚でも見たのか…?」

一人の警察官が言った。

確かに、薬物の乱用者には、幻覚が見えることがあると聞く。
でも、

今回は明らかに違う。

高校生は何かに、従って行動していた…?

だとしたら、この事故も計算されていたんじゃない？

永井は道路の反対側に振り向いた。

この事故にたくさんの人が集まっていた。

「奴らは、これぐらいのことを当たり前のようにやる」

「このまま、学校に通うのは危険すぎるんだよ」

(……………)

「だとしても、このぐらいで逃げ出せません」

「何言ってるんだ、殺されるかもしれないんだぞ」

「走らないんじゃない、死ぬのといっしょです」

信士の目は本気だった。

「なっ……………」

「ぼくの中には、過去が一つしかありません」

「だから、その一つを追い続けるんです」

「『今』のために……」

永井はひるんだ。

自分は今、中学生に言い負けている。

この少年の熱意、度胸に負けたのだ。

「……犯人は…犯人は僕が必ず捕まえて見せる」

「君は君のやるべきことをやるんだ、その先にきつと過去が見えてくる」

「じゃ、じゃあ…」

「ああ、学校に行つていい」

信士には、再び光が見えた。

さっきまでよりも、ずっと眩しい光が。

それは、目標が強くなったからなのか、

その周りが暗くなったからなのかは、分からないが…。

第26話・福崎夕子・

早朝から息を切らして走る少年がいる。

「ハア…ハア…」

永井さんの話を聞いた後、信士は今までの自分は甘かったと後悔した。

やっぱり、泳いでるだけじゃ足りない。
部活で走れないなら、自分で走るんだ。

「バシヤッ、バシヤッ」

この3000メートル泳ぐという練習も、こなせるようになってきた。

絶対にやってやる。

信士の思いが強くなったのは明らかだった。

「先輩、あの…デート行きませんか？」

部活の帰り、夕子に言われた。

信士は結局、詩織から話を聞けなかったことを思い出し、断ろうと思った。が、

(！)

「ダメ…ですか？」

夕子の目に少し涙が溜まっているのが見えた。

「……いいよ」

「…やったあ！」

喜ぶ夕子の姿を見る度に、また分からなくなる。

早く、真相を聞かないと。

デートは近くのゲームセンターからだった。

「ゲーセンってだめなんじゃなかったっけ？」

「そんな、堅いこと言わないで、ほら」

ゲームセンターでは、太鼓の達人とかクレインゲームを何回もした。

「そろそろ、帰る？疲れたしさ」

「先輩、最後にプリクラ取りましようよ」

プリクラ…

夕子とのが形として残ってしまう物だ。

……………どうする？

やっぱり、

「帰ろう」

ぼくは、夕子とのことを残したくないんだ……………。

夕子はやっぱり、寂しそうにしているのが、振り向かなくても分かった。

少しだけ気まずい帰り道。

しかし、もっと気まずい人物に出くわしてしまった。

「あ…！」

詩織だ。

詩織は精一杯に気づかないふりをしているが、分かっているのは、明らかだった。

「ねえ」

と、急に詩織が口を開いた。

「やっぱりさ、はつきりさせたら？夕子ちゃん」

第27話・記憶と気持ち

「やっぱりさ、はっきりさせたら？夕子ちゃん」

はっきりさせる…？

ぼくは、夕子の方を見た。

「…私が先輩の彼女だったっていうのは嘘なんです……」

嘘、だった……。

そのまま夕子は泣き崩れ、

「ごめんなさい……」

涙を流しながら、謝ってきた。

「なんで、嘘なんかついたの？」

詩織が言った。

「私は先輩が、好きで好きで仕方なかった」

「だからって……」

「でも、今日よく分かったんです」

「記憶はごまかせても、気持ちまではごまかせないってこと」

夕子は俯いたまま、静かに喋っている。

「今日、先輩がいつしよにプリクラを撮ってくれなかったのはそういうことですよね？」

「……うん」

「先輩、あの日私があんな時間に歩いてたのは、先輩が入院してたからなんです」

「もともと、学校が嫌いだった私に学校に行く意味を持たせてくれたのは、先輩だったから……」

そんなことが……

「今日、先輩と一度でもデートに行けたこと一生忘れません」

「本当にありがとうございました……」

夕日が3人の影を強く映していた。

詩織と歩く帰り道。

「……………」

黙っているばかりに詩織は、

「もしかして、残念だった？彼女、失って」

「…違うよ」

「ただ、やっぱりぼくは記憶喪失なんだって、また思い知らされた…」

詩織は信士が言っていることに、何も答えてあげられなかった。

「ありがとう…」

「え？」

「今日、夕子に代わりに言ってくれて」

「じゃなかったら、あのままぐだぐだ付き合ってたかもしれない」

「…うん、そうだね」

2人にやっと、笑顔が戻った。

「ところでさ、ぼくって本当に彼女いなかったんだよね？」

「さあ~~~~~どーだったかなあ？」

「なんだよ、それ！」

照りつける太陽は夕方でも暑く、夏本番が近づいてきたのを感じた。

第28話・変わるもの・

「よし、集合だ！」

九条先生が生徒達を集める。

夏休みはもう、中盤に入り、信士も陸上部に慣れてきていた。

「夏休みの前から、言っていたように夏休みの終わりに合宿に行く」

「合宿で実力を上げるのも、もちろんだが、夏休みにどれだけ成長出来たかを知る機会でもある、まずは合宿に向けてしっかり練習しろ」

「それから、その日の合宿では、隣町の北星中とかぶっている」

(……！)

北星中と言えば、水時がいる学校。

「北星中は毎年、結果を残す名門だが、こっちも負けていないというのを見せつけてやれ」

「以上！！解散」

「水時のとこつて凄いの？」

帰り道、詩織と浩太に聞いてみた。

「うん、毎年総合点では完璧に北星中だな」

浩太が答える。

「そこといっしょに合宿かあ」

「それよりさ、宿題進んでる？」

浩太が気まずそうに聞いてきた。

夏休みの宿題は初めて部活に来た日、詩織から渡されていた。

「うん、大体は終わったかな、後は自由研究ぐらい」

「は？」

詩織と浩太はとてつもないぐらいに驚いた顔をしている。

開いた口がふさがらないとはこのような時に使うのだと思った。

「え、なんか変なこと言った？」

「あの信士が……ありえない……」

そんなに！？

「記憶喪失って不思議だなあ」

2人は勝手に不思議がっていた。

「そっちはどうなんだよ？」

「俺は、手もつけてない、ピッカピカの新品だな」

「…大丈夫なの？」

「私も大体終わってるよ」

詩織はニコニコしながら言う。

「やばいかも……」

浩太は言葉とは裏腹に、なんとも思っていない顔で言っていた。

それから

信士は毎朝必死に走り続け、部活でもひたすら泳いだ。

最初はわき腹が痛くなりながら、走っていたが、今では速度を上げて、距離もずいぶん延び、

水泳にしても、息が楽になり、すいすい泳いでいた。

合宿まで、3日と迫ったその日、いつものようにプールに向かおうとしたところを九条先生に呼び止められた。

「今日の長距離の練習は外周だ、走るか？」

「はい！」

やっと、走れる！！

第29話 - 努力の成果 -

「お、来たか信士」

浩太が嬉しそうに、言った。

「早速やるぞ」

「よい、スタート!!」

前と同じように、5人は一斉にスタートした。

呼吸が楽だ。

体も軽い。

信士は前回とは違い、軽やかに走っている。

5周目に入っても信士は楽に走っていた。

「……………」

走りながら、浩太も驚くほどだった。

7周目に入ったとき、また浩太はスピードを上げた。

それも、前よりもずっと速いペース。

「はあ…はあ…」

後の3人は付いてこれなくなっている。

ラスト1周、浩太はさらにスピードを上げた。

「はあ、はあ」

ぼくは、最後まで浩太に付いていった。

ぼくも、浩太も息を切らしている。

「はあ…はあ…信士、すごいよ」

「…水泳の力かな…?」

呼吸が楽になったのに、水泳が関係あるのは間違いなかった。

泳いでいたのは、無駄じゃなかったんだ。

「おい、なんであんなにスピード上げたんだ!？」

九条先生が浩太に叱るように聞いた。

「信士、すげえ余裕そうだったから、なんか、競いたくなって…」

「……そうか、それで伊達、お前、泳ぐ以外に自分で走ってたな？」

一瞬、自分の事を当てられ、びっくりした。

「…は、はい」

「……………」

「…明日からはまた、普通に長距離に混ざっていい」

「ありがとうございます!!」

「信士、負けねえからな!」

「おう!!」

「…オレ、見直したよ」

浩太が改めて言った。

「…見直したって、なんかやな感じだな」

「お前、やっぱり本気だったんだって分かったからさ」

「野球辞めたって聞いたときはちょっと、見損なってたんだぜ?」

「そんな…なんで?」

「覚えちゃ、いないだろうけど、約束だったからさ」

「オレが、肩を壊して野球を辞めたときの」

浩太が野球！？

第30話・才能（センス）

知らなかった。

浩太が野球をしてたなんて。

「オレとお前は違うチームだったけどな」

「知らなかった…」

「でな、オレが肩壊して野球できなくなった時、お前が約束してくれたんだ」

「『オレがお前の分まで野球をやる』ってな」

それって…

ぼくが約束を破ったのに、黙ってたってこと？

「浩太…ごめん……」

「何言ってたんだ、水時との事聞いちゃあ文句なんか言えねえよ」

「それに…」

「今日のお前の走り見て、本気なんだって分かったから」

「嬉しかった」

「……頑張ろうぜー!!」

「……うん」

……本物だ。

伊達はまさに、本物だった。

退院の日、鈴木先生の言っていたことを九条は思い出す。

……「伊達君のこ
となのですが、……凄いです」

「凄いつて、何がですか？」

「退院するまで、本当ならありえない早さなんです」

「え……？」

「こつゆつって、やはり、才能なんだと思います」

あの時といい、今日の走りもだ。

夏休みの初日じゃ、ついていくのもやっとだったのに、

夏休みの間だけで、浩太についていくほどになった。

…ありえない。

こんな短期間で。

確かに努力もあるだろう。

でも、それだけじゃない。

あいつには、並外れた才能センスがあるんだ。

もしかしたら、

伊達が走り続けることができれば、

勝てるかもしれない。

最強と言われる、努力の天才、水時 走に。

九条は信士を真剣に育てたいと思った。

「全員揃ったか！？今日から2泊3日で合宿だ」

「この合宿が今後、大事になるから気を引き締めろ」

「以上！バスに乗り、出発」

久しぶりに水時に会う、どれだけ近づけたんだろう？

いや、

この合宿で水時に近づく、この3日間で何かをつかむんだ。

信士は気を引き締め、バスに乗り込んだ。

第31話・合宿の始まり・

・合宿1日目・

着いたのは、なんてことのない普通の民宿だった。

「よろしくお願いします!」

民宿の人に挨拶した後、

「よし、じゃあ早速練習行くぞ」

「はい!!」

そこは、ちょっとだけ古い、400メートルトラックのある、陸上競技場だった。

「おお、意外と立派じゃん!」

浩太も声を上げて喜ぶほどだ。

「ここは、北星中と合同で使うからな、来たら挨拶すること、分かったな?」

「はい!!」

「ランニング!」

アップから、ぼく達はテンションが上がりっぱなしだった。

「次、ブロック！」

「長距離はそっちの山で山登りだ」

山登り……？

「うお、ワクワクする〜」

浩太はノリ気だ。

しかし、あのでかい山を登れと。

迷うな。

信士の心によぎった、このメンバーで山登りは危険すぎる。

「まあ、ちゃんとした道はあったはずだから頑張れ」

はずって……？

「よっしゃっ、行こーぜ」

浩太がノリノリで走っていった。

「待てよ、浩太ー」

しょうがなく山登りに行くことになった。

……その１０分後

「おい、あれ！」

ついに、北星中の生徒達が来た。

九条先生が慌てて、北星中の顧問、沢村先生に挨拶に行く。

北星中陸上部は競技場入り口に一列に並び、

鷹谷中陸上部も急いで一列に並んだ。

鷹谷中部長、市原 哲と

北星中部長、水時 走が数秒間無言で睨みあつ。

緊張感の中、水時が先に挨拶をした。

「よろしく願います！」

「しまーす！！！」

「こちらこそ、よろしく願います！」

「しまーす！！！」

これが、合宿の本当の幕開けだった。

第32話 - 名將沢村 -

「なんか、山登りつてまさに合宿だよな」

競技場の隣にある山に登りながら、浩太が言う。

……そうかなあ？

まあ、「とりあえず」山に登り続けるぼく達。

「にしても、あつち」

真夏の暑さもぼく達の敵だった。

「沢村先生、こんな平凡なこと一緒に練習していただきありがとうございます」

「いえいえ、とんでもないです」

沢村先生は定年が近い、60過ぎの人。

名將と言われ、今まで見てきた中学では、いづれも結果を残してきた。

「ところで、伊達君というのは、どの子ですかね？」

「だ、伊達ですか？伊達は今、長距離であの山を登ってます」

「伊達をご存知なんですか？」

「いえ、水時が多少気にしているようだったので」

（水時が……？）

「まあ、楽しみにしてますよ」

そう言い残し、沢村先生は歩いていってしまった。

にしても、

やはり、凄い人数だ。

軽く50人はいるだろうか？

この人数をまとめるのは、半端なことではない。

九条は改めて、沢村と水時の力を思い知らされた。

「水時、長距離は山登りに行ってこい」

「山ですか、はい」

「行くぞ」

「はい!!」

長距離のメンバーがついていく。

「なんか今日、水時さん気合い入ってない？」

後ろのメンバーがコソコソ喋っている。

「ああ、駅伝が近いからじゃないか？」

・・

「あの事が……」

「おい！私語すんな!!」

「は、はい」

『ちっ』

水時は心の中で舌打ちをした。

負けない。

誰にも。もう、絶対に。

心に決めた言葉をもう一度、自分に呟いた。

「伊達、か…」

「山ではちあわせ、果たしてどうなるかな…？」

沢村が薄い笑みを浮かべ、呟いた。

第33話・雨の悲劇・

頂上まであともう少し。

と、その時

「あれ、鷹谷中じゃねえか？」

下から声が聞こえた。

「ん？」

振り返ってみると、そこには、

「……水時」

「なるほど、北星中も山登りか！」

浩太が納得したように手をポンとつつた。

「おい、行くぞ」

水時が10人ほどを連れて、また歩き出した。

「なんだよ、冷たい奴だな」

浩太は水時の冷たい態度にイライラしながら、再び歩き出した。

「頂上、とうちゃーくー!!」

頂上に着いた途端、浩太が大きな声を出した。

「10分休憩、その後再び出発」

水時が早口に指令を出す。

「ぼくもそうする?」

「……だな」

ふと、空を見た。

「えっ?」

怪しい雲が迫って来ているのが見えた。

「あゝあ、さっきまであんな晴れてたのにな」

隣で浩太も空を見上げている。

「…早めにでるか」

水時が小さく呟いたのが聞こえた。

「下りるぞ」

「はい…」

休憩が足らず、北星中の返事の声は小さかった。

水時は速いペースでどんどん進む。

「オレらるときよりずっと速いな」

浩太と話していると。

ポツ…ポツポツ

雨がついに降ってきた。

「やばいな…」

ザアアアッー！！

雨はすぐに強くなった。

地面は早くも、ぬかるみ始めている。

スピードは緩まないまま、進んでいく。

ズザッ！！

北星中のひとりが足を滑らして、転んだのが見えた。
尻もちをついている。

「おい、走！転けてるって！」

「分かつてる、大声出すな東條」

水時は仲間の言葉を聞かず、そのまま走る。

ズツ

水時の後ろを走っていた北星中のやつが足を滑らせた。

「危な……」

信士がとっさに言う前に体は前に倒れ、

水時の背中を押してしまった。

水時は斜め横の太木に頭から倒れた。

ガッ!!

鈍い音が鳴り響き、水時は倒れた。

「お、おい!走!!」

東條が慌てて、水時を起こそうとする。

「……ダメだ、気失ってる」

雨は強く降り続けていた。

第34話 - 水時の敗北 -

「ハア、ハア……」

体が重い。

足が思うように進んでくれない。

一年の秋、駅伝6走を任された水時は2位でたすきを受け取った。

県大会に行けるのは3校だけ。

……苦しい。

後ろから他の選手が迫ってくる。

「ハア……ハア……」

ダメだ。

そう思った瞬間から、

隣を後ろの選手が通り過ぎていった。

泣きながら悔しがる先輩達。

「すみません……すみません……」……………

.....

バツ!!

水時は布団から飛び起きた。

（夢、か……）

周りを見渡し、やっと状況を理解した。

昨日の事を思い出してみる。

確か頭を打って…

そこからの記憶がない。

「あつ！水時先輩！！」

北星中1年のひとりが気づき、沢村先生を呼んできた。

「大丈夫か？」

「はい、大丈夫です」

「…それよりも、オレは昨日どうやって？」

「伊達信士とかゆう鷹谷中のやつが担いで来てくれた」

（信士が…？）

ドドドドッ!!

凄い足音とともに、昨日の足を滑らせたやつが駆け込んできた。

「先輩、本当にすいませんでした」

土下座して謝っている。

「…顔上げる」

「分かったから、伊達呼んできてくれ」

「は、はい!」

「それから、先生オレは今日から練習には普通に参加します」

「…お前はやるなと言ってもやるからな」

「無理はするな」

そう言い、沢村先生は部屋から出て行った。

そして、入れ替わりに信士が入ってきた。

礼を言おうと思ったとき、信士は思いもよらない一言を発した。

「…昨日、東條君から話は全部聞いた……」

「……………」

「ごめん…でも…」

「初の敗北だったんだ」

「でも、敗北のおかげで今のオレがいる」

人に話したのは、初めてだった。

「今回の駅伝はその時の先輩の為に絶対優勝する」

「…駅伝か」

「じゃあ、ぼく達もでる！」

「お前らが出ようと関係ないけどな」

「まあ、昨日の礼は言っておくよ」

「いいよ…なんか気持ち悪いし……」

雨は完全に止んで、日が部屋の中に入ってきていた。

第35話・トランプ・

・合宿2日目・

この日の練習は全員室内練習。

やはり、昨日の雨で外で練習するのは無理だった。

しかし、さっきから筋トレばかり。

「外で練習の方が楽なんじゃねえか？」

浩太もそう言うほどだった。

朝のことが気にかかり、水時をふと見てみる。

(……すごい！！)

周りを圧巻するスピード。

腕立ての時に見えた腕は男のぼくが見ても惚れ惚れするほどに筋肉が引き締まっていた。

やっぱり、水時は凄い。

それにしても、キッツ！

「あーやっと終わった」

つらい練習が終わり、民宿に戻った。

ふたつの学校の生徒が集まって泊まっているのだからこの民宿もある意味凄いと思う。

その日の夜

「おう、来たな」

ぼくと浩太がいる部屋に来たのは東條君だった。

昨日、仲良くなり今日の練習の終わりに誘っていた。

「昨日は本当にありがとう」

「いやいや、どーいたしまして」

頭をかく浩太。

おそらく、君に言ってるんじゃないと思うんですけど。

「それにしても、水時今日、練習してたけど大丈夫だったの？」

「ぼくが、気を取り直して言った。」

「本人いわく、何ともないって」

「でも、本当に昨日の信士君はすごかったよ」

「そんなことないよ」

と、浩太が言う。

……頼むから黙っててもらえないだろうか？

「急に信士君がぼくが運ぶって言ったときは本当に助かったよ。沢村先生も感謝してたし」

「いや、…」

本当に昨日は大変だった。雨は強く、地面のぬかるみ方も凄まじく普通に下るのも困難な状況で人を一人担いで下ったのだから自分でもびっくりする。

その疲れで昨日の夜は即寝てしまったのだが。

「そんな話よりさ、今夜は楽しく語り明かそうよ」

浩太がトランプを取り出しながら言う。

「そいや、水時は来ないの？」

「誘ってはみたんだけど、寝るって言うてた」

確かに水時らしい答えだった。

「おっ、トランプ!？」

詩織が男子部屋にも関わらず普通に入ってきた。

「変わってるな…お前……」

なんだかんだと楽しく喋りながらぼく達はトランプを楽しんだ。

2日目終了

第36話・ビルドアップ走・

・合宿3日目・

「今日は合宿、最終日だ。気を引き締めて練習するように」

昨日今日と晴れ渡り、3日目は競技場を使うことができた。

「はい!」

「それじゃあ、長距離は合宿のまとめにビルドアップ走をする」

「え〜」という浩太の声が聞こえる。

「ビルドアップ走ってなに？」

小声で浩太に聞いた。

「なっがい距離をだんだんスピードを上げていきながら走るんだ」

…それはキツそうだ

「トラックを二年生は30周、一年生は15周だ」

ほっと胸をなで下ろす一年生達。

「最初は一周、二分ペースでいい。5周ごとに五秒ずつあげていく

ように」

「ペースは水時、頼む」

「はい」

ピッ！！

ストップウォッチが押され、長距離全員がスタートした。

最初は楽なペース。

それでも、照りつける太陽は暑く、確実に体力を消耗していた。

10周目を過ぎると、バテる人達が出てきた。

一年生に関しては全員キツそうだ。

15周が終わったところで一年生は全員へたり込んだ。

走る度に足は重くなり、なかなか前に進まない。

半袖のシャツはもう、ビショビショだった。

「ハア…ハア…」

気がだんだん遠くなってきた。

今、何周走っただろうか？

分からないまま、足だけが進んでいく。

「25周目!!」

九条先生の声が聞こえた。

…あと5周

ドサッ

どうやら、誰かが倒れたようだ。

振り向くのも厳しい、重たい体を前に進ませるので精一杯だった。

「ハア、ハア…」

とうとう、キツくなったところで九条先生の声が聞こえた。

「ラスト1周、競争だ!!」

(競争…?)

全員がスピードを上げた。

それでも、みんなキツそうだ。

水時が集団より前に出たのが見えた。

「ハア…ハア…」

…勝ちたい

「ハア、ハア、ハア…」

勝ちたい！！

(え……………！？)

その時、急に体が軽くなった状態に陥った。

息は苦しいけど、体は軽い。

ぼくは、一気にラストスパートをかけた。

第37話・ランナーズハイ・

1人目…2人目……

前にいる選手を次々に抜かしていく。

いける！！

「ハア…ハア…」

前から二番目を走っていた浩太に並び、ついに、抜かした。

浩太は驚いたような、悔しいようなそんな顔をしている。

そして、水時を射程距離に捉えた。

信士はさらにスピードを上げた。

水時に並び、『抜かした！』

そう思った瞬間、

水時はスピードをグンと上げた。

信士も必死について行こうとする。

ラスト100メートルにさしかかったところで、

「あばよ…」

水時は勝ち誇ったように言い、本気のラストスパートをかけた。

くうッ！

信士はついていこうとしたが、後50メートルぐらいのところで力つき、水時の背中が離れていくのを感じた…。

信士はゴールと共に倒れ、なかなか立ち上がれなくなった。

結果は2位。

普通に考えれば、優秀な成績だが、信士にとっては、水時に勝てなかったという悔しさだけが残った。

「そんな、浮かない顔すんなよ」

呼吸が落ち着いてきた頃に東條君と同着で3位だった浩太が言う。

「十分、すげーんだからよ」

「うん…」

「伊達君」

合宿の終わり、沢村先生に呼び止められた。

「は、はい」

「君だったね、初日水時を担いできてくれたのは、ありがとう」

「い、いえ」

東條君からは聞いていたが、確かに凄い人っていうオーラはでていた。

「君は、最後の一周どんな状態だったか自分で分かるかい」

「えっと…確か、急に体が軽くなって……」

そつだ、今まで苦しかったのに急に体が楽になった。なんでだろう？

（自分では、気づいてないのか…）

「ランナーズハイ……」

沢村先生は信士には聞こえないぐらいのこえで小さく呟いた。

「君のお父さんの名前はなんていうんだ？」

お父さん…？

退院したときから、家にはお父さんはいなかった。

母さんには、そのことを今まで聞かないまま過ごしていた。

「…分からないです」

「そつか…」

「鷹谷中、集合！！」

哲の声が聞こえた。

「すいません、失礼します」

信士は走っていった。

…似ている。

伊達という名字から気になっていたが、やはり間違いない。

「あいつ」の息子だ。

沢村は振り返り、北星中の生徒を集め、ミーティングを始めた。

第38話・眠たい帰宅・

「お疲れさまでしたあー!!」

3日間の合宿が終わり、誰もが疲れきってバスに乗り込んだ。

なんか、いろんなことがあったなあ。

信士は席に座った途端、眠りについた。

.....「.....士、信.....信士！」

バシッ!!

「.....いったあー!!」

「信士、着いたよ〜」

目を開けると、そこには詩織の姿があった。

「う、うんー」

叩かれた頭をさすりながら信士は、やっと学校に着いたことを確認した。

「ほら、浩太も」

バシィッ!!

(うつわゝ、痛そう)

「いつてえ、なにすんだよ!!」

「ぐっすり寝てるからでしょ、起こしてあげたんだから感謝する！
ほら、行くよ」

「く、くうう」

信士と浩太は痛む頭をさすりながら、バスを降りた。

「陸上部集合!!」

「合宿3日間お疲れさん、夏休みの後3日部活ないから休み明けの
テストに備えて勉強しておくように」

「解散!!」

「「あ、あの先生」」

九条先生に話しかけたとき、誰かと声がかぶった。

「あ」

市原 哲だ。

「先、いいよ」

「あ、うん、ありがとう」

「先生、駅伝に出させて下さい！」

「駅伝？」

「駅伝か、て言ってもなあ、駅伝は6人でするもんなんだよ長距離で出るんじゃないだろ」

確かに。

そこまで考えずに言ってしまった。

どうしようかと考えていると、

「じゃあ、オレ、走りましょうか？」

隣の市原が言った。

「オレなら、400ですし、まあ体力はみんなに劣るかもしれませんが、他が下手に走るよりはいいと思います」

「そうか、お前がいいならありがたい」

「ありがとう、市原君」

「なんか、信士に『市原君』って言われんのって気持ち悪いな」

「哲でいいよ、哲で前はそう言われてたし」

「うん」

「そういえば、市原もなんか、用があつたんじゃないのか？」

「ああ、オレは別にいいんです、大した用じゃなかったんで」

「そうか」

「それじゃ、お前らも帰れ、お疲れ」

そうして、眠たい目をこすりながら、待ってくれていた、浩太と一緒に帰った。

「にしても、詩織のやつ、強く叩きすぎだよな」

「うん……」

第39話・母の思い

「ん、ん、ん」

目が覚めた。

体のあちこちが痛む。

時計に目をやってみる。

10時30分

どうやら、ずいぶんぐっすり寝ていたようだ。

「あら、起きたの？」

リビングに行くと、母さんがいた。

「ご飯どうする？中途半端な時間だけど？」

「食べる。お腹空いたし」

母さんはパンと紅茶を用意してくれた。

信士は食べながら、昨日、沢村先生に言われたことを聞いてみた。

「前から気になってたんだけど、父さんはどうしていないの？」

「…………あ、ああ、父さんは信士の幼い頃に亡くなったの」

「…………へえ」

「あ、そうだ！」

そう言い、母さんは青い色のケータイを取り出した。

「これね、信士のケータイ。警察の人が捜査の為に使ってたんだけど昨日、返されたの」

「うん、ありがとう…」

アドレス帳を見ると、陸上部のみんなと洋介のメアドもあった。他にも、知らない名前が幾つかあるけど、おそらく野球の仲間だろう。

「信士」

「ん？」

「もし、命が狙われるようなことがあったら、今度は永井さんに従って…」

「本当は今すぐにでも、隠れさせるのが正しいのかもしれないけど、信士の好きにさせたいから」

「…分かった、でも、見つかるまでは好きにやるよ」

母さんは少し笑って、「買い物に行くから」と家をでた。

父さんは亡くなったんだ。

いつたい、どんな人だったんだろう。

信士は、試しにメールしてみようと思ったが、テスト前だということを出し、勉強する事にした。

「おはよー」

朝、詩織にいきなり背中を叩かれた。

「おはよう……」

「どしたの、元気ないじゃん？」

「みんな、どんな顔するかなってさ…、また、質問攻めは覚悟してるけどね」

ずっと、不安。

でも、乗り越えないと。

「…大丈夫だよ」

「みんな、信士が帰って来るのを待ってたんだから」

「うん」

信士は2年1組の教室のドアに手をかけた。

ガラッ

教室を見回すと、何人かの生徒達がもう来ていた。

生徒達は信士を見た途端、

「信士!!」

「大丈夫!?!」

「復活じゃん!!」

生徒達はいきなり、信士を取り囲んだ。

第40話・クラスメイト・

笑顔の生徒達。

戸惑った様子を隠しきれない信士に薄く笑いかけ、詩織は席に着いた。

来る生徒、来る生徒がそれぞれ信士に笑顔を見せ、席についていく。なんだか変な感じだったが、不安だらけだった信士にはありがたかった。

「信士…!？」

名前を周りとは違うどこか驚きの混じった声で呼ばれた。

振り返ってみると、そこには、エメラルバグを肩に下げ、日に焼けた少年が立っていた。

「おう、圭太おはよう」

周りにいた1人が言った。

「信士、生きてた」

「圭太」と呼ばれた少年はそう言って、抱きついてきた。

「やゝ、良かった良かった」

信士が困った顔をしていると、1人が控えめに言った。

「こいつ、沖田圭太、野球部なんだ」

「へ、へえ」

「ほら、全員席に着け」

九条先生が教室に入ってきた。九条先生が教室に入ってきた。

と、後ろから一緒に1人の生徒が入ってきた。

「あれ、誰だ？」

どこからともなく声が聞こえる。信士は詩織に呼ばれ、やっと席に着いた。

「隣だったんだ？」

「うん」

「今日はまず、転校生を紹介する」

「高野中から来た、柊 俊哉君だ、じゃあ挨拶頼む」

「は……はじめまして……えっと……前の学校では、……一応……」

「……一応……陸上部でした……」

「おおっ！陸上部！？」

大きな声と一緒に浩太が入ってきた。

「なに遅れて来てんだ。どうせ、今日から学校なの忘れてたんだろ」

「は、ははは……」

どうやら、凶星だったようだ。

「それから、信士にも挨拶してもらったか」

急に指名され信士は焦った。

とりあえず、信士は黒板の前に立ち、

「ぼくは、夏休みより、前のことを覚えていません」

「……………」

「でも…今日、学校に来てみんなが笑顔で迎えてくれたのは嬉しいかったです」

「これから、よろしくお願いします」

「……………」

「なんか、信士らしくないな」

「堅苦しいよ」

ハハハハッ

教室は笑いにつつまれた。

「今日、朝会あるから体育館行くぞ」

九条先生に言われ、生徒達は一斉に廊下に出る。

柊と信士もどうすればいいのかわからなかったが、とりあえず教室を出た。

なんとか、列に並び、体育館へ向かう途中、浩太が小声で言った。

「信士、詩織には感謝しとけよ」

「……？」

「記憶喪失って言葉禁句にして、信士が来たときは笑顔で迎えるようにってみんなに呼びかけたの詩織なんだぞ」

あっ……

そうだったんだ。

信士は詩織の方を見た。

「あ、でも言うなよ、オレが怒られるから」

ここなら、やっていける。

信士は浩太の話を聞きながら、そう思った。

第41話 - 柊 俊哉 -

「よっしゃ〜テストおわりい？」

テスト終了のチャイムと同時に浩太が100パーセント喜びの声で言った。

そうじ、帰りの会とテスト後の眠たい作業も終え、部活に向かう。

「行くぞ〜信士。駅伝に向けて練習だあ〜」

「うん！」

信士も教室を出かけたとき、ふと思い出した。

「柊君さ、前の学校で陸上部だったんだよね？」

柊は急な声に若干、びっくりした様子だった。が、

「あ…あ、うん……」

「そんじゃ今日、陸上部観に来ない？」

「おお、来いよ来いよ」

浩太も続けて言う。

「あ…や、いいんだ…部活入るか分からない…し、今日は帰るよ」

柊は顔を少し赤くして言い、

「ありが…とう」

そう言った。

「分かったよ、気が向いたときにでも来てね。いつでも歓迎だから」

もう一度、柊は「ありがとう」と小さな声で言い教室を出て行った。

「なんか、変わったやつだよな」

浩太が柊の背中を見ながら言う。

「そうだね…」

「さ、部活だ部活、行くぞ」

校庭に出ると、他の駅伝部のメンバー4人がすでに集まっていた。

「おう、哲よろしく」

浩太が哲に言う。

「おう」

「哲先輩も駅伝走るって本当だったんですね」

他の3人は駅伝のことも、哲のことも今日の朝聞かされたらしく、

若干戸惑っている。

「ああ、あまり期待されても困るが、よろしく」

「先生から、今日の駅伝部の練習は外周12周だと聞いている、それじゃ浩太、後は仕切るの頼む」

「了解」

「ジョッグ」

駅伝部の期間は、陸上部とは別に練習をするとう決まりだった。

「ふう…じゃあ、そろそろ行くか」

6人は浩太の「スタート!」という声と一緒にスタートをきった。

「なんか、駅伝部の始まりって感じだね」

「おう、これからだ。絶対、北星中に勝つぞ」

気合いを入れて走る、信士達。

と、それを物陰から見ている人物がいた。

「……………」

柊である。

誰も柊の存在に気づくはずもなく、走るのだった。

「おつかれ」

全員、地面に座り込んだ。

「さすがじゃん、哲。最後までついてくるなんてさ」

「ははっ…ギリギリだよ……」

こうして、記念すべき駅伝部、一回目の練習は終えたのだった。

「ただいまー」

入った瞬間、玄関で母さんと出くわした。

「あ、おかえり。丁度よかったわ、ちょっと買い物行ってくるから留守番お願い」

「はい」

信士は真っ直ぐ、自分の部屋に向かい、机に座った。

部屋は最初来たときは、いろいろと汚かったものの、夏休み中に片付け見た目ではいくらかはきれいになっている。

「机の中も、片づけないと…」

信士は机の引き出しをあけ、中を見た。

「ん？」

そこには、『信士へ』と書かれた封筒があった。
裏には

『2017年 6月10日』

そして

『伊達正信』

と、書かれていた。

第42話 - あの日の実 -

伊達…正信…？

伊達ってまさか

信士は母さんの部屋に走った。

部屋の隅に埃をかぶったアルバムを見つけ、開いてみる。

「やっぱり……」

家族表のなかに

お父さん 伊達正信

と、書き込まれている。

やっぱり、お父さんだったんだ。

封筒の日付は今年の6月10日。

お父さんは、生きている！？

信士は封筒の中を見てもうことにした。

「？」

中に入っていたのは、手紙。

その手紙には、

『急なことで申し訳ない。ある組織について調べるため、しばらく帰って来れなくなる』

『俺は、危険な立場にいる、家にいてはお前たちが危ない』

『家のことを頼む』

そう書かれていた。

組織？

信士の頭に真っ先に浮かんだのは「Crow」のことだった。

いや、考え過ぎだよな。

それより、母さんはどうして「父さんは死んだ」なんて嘘をついたんだろう。

何にも分からないまま、手紙を何度も読み直した。

それから、30分程が過ぎた頃、

「ただいまー」

母さんが帰ってきた。

信士は手紙を突きつけようと思ったが、少し父さんについて聞いてみることにした。

「父さんってさ、何の仕事してたの？」

「……刑事よ」

「！」

本当にそうなのかもしれない。

まさか、「Crow」と…。

「母さん、これ…」

信士は怖くなって、母さんに手紙と封筒を見せた。

「母さんはぼくが小さいときに亡くなったって言ったけど、その手紙はあの事件の少し前のものだよね」

「……………」

「なんで、嘘なんか…」

「…お父さんに頼まれたの、信士には死んだと伝えてくれって……………」

「信士」

「あなたをあの日、沼から助けだしてくれたのはお父さんだったの」

あの日、助けてくれたのがお父さん…。

信士は戸惑った。

さっきまで、遠いと思っていた、父さんは近くにいた。

「そんな…どうして…」

「この手紙にある、組織っていうのがC r o wのことだから」

「父さんはあの日、C r o wがどنگり沼に来るっていう情報を掴んでいたの」

「だけど、ぼくが現れた…」

母さんは黙って頷き、続けた。

「その時に、父さんはC r o wについて調べ回っていることがバレて…」

「だから…、自分は信士が幼いときに死んだんだと信士には伝えてくれて…」

それって、ぼくのせいだ……

やはり、真実は信士の予想を超える、悲しい結末だった。

第43話・転校生・

「刑事ってことは、永井さんも知ってたの？」

永井さんは一言も父さんのことについて喋っていなかった。

「うん…」

永井さんまで……。

「それより…父さんは今、どこに？」

「分からないの…信士が記憶喪失だって聞いて、少し経ってから急に姿を消して…」

「そうなんだ…」

知らないことを沢山知り、信士にとって疲れる1日だった。

「今日も、やるぞー！」

駅伝本番まで、あと2週間ちょっと。

練習にも、いつも以上に熱がこもっていた。

この日の練習は外周。

いつものように走っていると、

「ん？」

信士は何かに気づいた。

「浩太、あれ」

信士が指を指した方向には、

「柊君…？」

柊は毎日、長距離の練習風景を見続けていた。

柊は自分がいることがバレたことに気づき、逃げ出した。

「信士…追っかけるぞ！」

「えっええ！？」

浩太は柊君を追いかけ始めた。

「哲、ごめん。ちょっと、行ってくる」

哲はあっけにとられていたが、とりあえずは頷いてくれている。

「柊君、待って」

柊を追う、信士と浩太。

しかし、差が縮まる気配はない。

「ちよつ柊君、足速っ」

何者なんだ？

そう思うぐらいに、柊君の体力は底知れず、なかなか差が縮まらない。

と、柊君は行き止まりにさしかかり、やっと追いつくことができた。

「はあ…はあ…」

3人とも、息を切らしておりなかなか喋ることができない。

「…柊君…陸上部だったって、長距離だったんだね」

「…なんで…言ってくれなかったんだ…よ？」

息も絶え絶え、2人は柊君に質問をぶつける。

「…僕は…走るのが好きだった……」

「…だから、毎日…毎日…走って頑張ってきたんだよ…」

「でも…誰も認めてくれなかった……前にいた陸上部には…本気でやろうなんて人はひとりもいなかったんだ……」

ぽつぽつと話続ける、柊君。

信士と浩太は黙って、話を聞いている。

「そんなとき、陸上部は急に廃部になった」

「全員、やる気がないから、在ってもしょうがないからって勝手に…」

黙って聞いていた、2人には信じがたい話だった。

「…それで…この学校に？」

「ううん、転校はたまたま…」

「もう一回、ここで走ればいいじゃん！」

浩太が言った。

第44話・新たな仲間・

「もう一回、ここで走ればいいじゃん！」

黙る柊君。

「んでさ、一緒に駅伝走ろうよ」

「…怖いんだよ、独りも…仲間も…」

「それに…もう走らないって決めたから……」

「じゃあ、なんで見に来てたの？」

今度は信士が言う。

「まだ、走りたいからじゃないの？」

「……………」

「大丈夫、ぼくらは絶対に君を裏切らないよ」

「！」

「だから、一緒に走ろう……」

柊君は少し悩んでいる様子で、俯いている。

「僕は…僕は…」

「…ごめん!」

柊君は2人の横を猛ダッシュで駆け抜けていつてしまった。

「…行っちゃったな」

「戻ろつか…」

なんで…なんで…。

走りながら、柊は何度も後悔した。

いや、それよりも自分に一緒に走ろうと言ってくれる人に会えたことの方が嬉しい。

人は怖いけど…。

信じてみようかな。

あの人達なら、きっと信じられる気がする。

「おう、おかえり」

駅伝部のメンバーに迎えられた。

「案外、遅かったな」

「柊君がいきなり足速くてさ…」

あの足の速さは間違いなく、このメンバーでも上の方。

間違いなく、戦力だった。

「で、柊君は入りそうなのか？」

哲が聞いてきた。

「分からないけど…でも、きっと来るよ」

「したら、お前らの誰かが補欠だな」

浩太が一年生の3人に言った。

そもそも、駅伝部は2年生3人と1年生が3人のチーム。

浩太が言った瞬間、3人の間に若干、火花が散ったような気がした。

負けてられないな。

水時にも、柊君にも、このメンバーにも。

「浩太、走ろう」

「おう」

秋に近づく夕暮れの下を少年達は息を切らしながら、走っていた。

次の日

「本当に!？」

朝、学校に来たときの一番の第一声は、なんとも嬉しい新しい仲間の知らせだった。

「うん、やっぱりもう一回、頑張ってみるよ」

「ありがとう…柊君」

「じゃあ、早速先生に知らせに行こう」

これから、駅伝部が変わる。

いい方向に北星中に勝つために、間違いなくぼくたちは進んでいる。
職員室に向かいながら、信士はそう思った。

第45話・目標の価値観・

「おつかれー!!」

今日の練習も終了。

柊君もまだ、ほんの少しぎこちないけどみんなに慣れてきたようだ。

「信士、俊哉、帰ろーぜー」

いつものように、浩太が言う。

「うん」

柊君の家は方向は同じだが学校からとても近く、一緒に帰ると言うてもすぐに「じゃあね」と言う距離にある。

この日も柊君とはすぐに別れ、結局、浩太とふたりでの帰り。

「そっぴゃ、明日駅伝のメンバー発表だな」

「あぁ…そっぴゃそっぴゃだね」

「信士は誰が補欠になると思う?」

誰が、か…。

おそらく、前に浩太が言っていたように、一年生の竜太、智、栄二の誰かだろう。

この中で言ったら、一番遅いのは…。

「栄二…かな……」

「多分な、オレもそう思う」

「栄二はいいやつなんだけどな」

「うん…」

信士は帰ると、すぐに家を出ていった。

なんだか、この頃は走っていないと落ち着かなくなってしまう感じがしない。

いつもの道を少しスピードを上げて走っていると、

ちょうど栄二に出くわした。

「あ、伊達先輩、ランニングですか？」

「うん、まあそんなとこ、そっちこそランニングだろ？」

「はい、まあ……」

栄二は、はにかみながら言う。

「そうだ、先輩、一緒に走ってもいいですか？」

「うん、かまわないよ」

信士は「先輩」と言われるのがなんだか、齒がゆかったが、ちょっと嬉しかったりもしながら走っている。

「ふう〜終わりー」

信士が足を止めると、栄二も同じ様に足を止め、電柱に寄りかかりながら息を切らしている。

息を整えていると、栄二がいきなり話しかけてきた。

「先輩、やっぱりオレ多分、補欠ですよね……」

信士は答えに戸惑ったが正直に、

「……かもしれないね」

そう答えることを選んだ。

「ですよ、すいません変なこと聞いて」

「いいや……」と答えながらも信士の中では心がズキズキと痛んでいる。

「そういや、伊達先輩はどうして急に野球まで辞めて長距離選手になったんですか？」

「ああ…『ライバル』に勝つためだよ」

「ライバルって…？」

「北星中の水時 走」

「ええー！あのですか！？」

栄二は随分、びっくりした様子だった。話を続ける。

「先輩は凄いですね…そんな、格上の人にすら挑む勇気があって…」

「オレなんか、外周でもついてくのがやっとで目標なんか低くて、でもそれすら出来なくて…」

栄二は涙目になりながら自分のことを打ち明けている。

「目標なんて、なんだっていいんだよ」

「それを達成するまで何回だって頑張ればいい…」

「明日、なんて言われようと、ぼくらは駅伝部のメンバーだ」

「栄二だけをおいてくようなことは絶対にしないよ」

栄二は、

「はい…」

そう答えながら、大粒の涙をただ、ただ流していた。

第46話・区別の役目・

翌日

九条先生に駅伝部の7人が呼ばれた。

信士はメンバーの発表だろうと身構えている。

「それじゃあ、メンバーの発表をする」

「一区、柊。二区、信士。三区、市原。四区、浩太。五区、竜太。六区、智。これでいくぞ」

名前を呼ばなかった栄二は分かっていたとは言え、悔しそうにしている。

「栄二、悪いがお前はマネージャー的な仕事に回ってもらっぞ」

「はい…」

それから、聞いた話ではこの区にした理由は、

まず一区の柊は、一発目で前の方にいたいという狙いかららしい。

それから二区の信士、四区の浩太はこの2区は特にキツく、他の中学校でもここに一番速い人をもってくるかららしい。

三区の哲は、三区が一番短く、ダッシュする力が必要なので、元は400メートルの選手である哲にはちょうどいい区ということ。

五区、竜太と六区、智は前半で勝負しようという九条先生の狙いからだそうだ。

「それから、他の中学校では三年生も出るからな、目標は20位以内！」

20位以内：確かに他は三年生も出るのだと考えれば、妥当な目標ではあるのだろうけど。

北星中ではもつと上をいくはず。

「まあ、来年もあるからな、今年はやれるとこまでやってみる」

最後は二年生達に言ったらしい。

それでもメンバー全員が「やってやる」そう思った。

それからの練習はひたすら長い距離を道路の上で走ることが多くなり、駅伝本番のときに走る道でもたまに九条先生の車に乗せてもらって行き、走るようになった。

「二区、四区はほぼ同じ道か…」

二区、四区はさすが強者が集まる区で、坂道が急なうえに、3・2kmもあるコース。

基本、信士と浩太は一緒に走っていたが、いつも競争するため良く記録が伸びてきていた。

そして。

ついに、本番の朝が来た。

みんな、場所へ向かう車の中からもう既に緊張の面もちである。

特に柊君はよっぽど緊張しているようで、さっきからなんだか暗い。

浩太は…なんにも感じていないようだけど。

集合場所からのアップからなにまですべて人混みの中。

「くっそ〜混んでんな」

浩太が少しイライラした様子で言う。

「50校ぐらい出てるからな」

哲が答える。

そんなに出るのか…と信士は思い直す。

確かに、20位以内は妥当な目標なのかもしれない。

そのまま、緊張して過ごしていたが、時間は待ってくれない。

早速、一区の柊が集合に呼ばれたのだ。

緊張をした顔のまま、歩き出す柊に、

「先輩！目標を大きく、一位でいきましょう！！」

栄二が言った。

目標を大きく…か。

忘れそうになっていた、この前自分がそのようなことを言っていたのに。

高い目標は恥ずかしいものじゃない。

「そうだ、一位目指してこう！北星中に勝つんだ！！」

「チーム」全体の目標がやっと定まった瞬間だった。

第47話・可能性・

駅伝で一位？

そんなのは無理だろう。他の中学校には、三年生がいるんだし…。

スタート地点に向かいながら、柊は思う。

でも、何故かもう、緊張がない。

さっきまで、自分でも分かるぐらいにガチガチだったくせに。

…きつと、何かがあるんだ。あの場所には。

「一区、スタートついて」

無理だって分かってたって、目指したくなる。

パンツ

スタートの合図と共に50人ほどの中学生達が一斉にスタートする。

だから、繋ぐ。

僕の全力を使い果たして、信士君に繋ぐんだ。

毎日、見に来ていたみんなと一緒に走れる最高の、ずっと立ちたか

った場所なんだから。

「二区、集合！！」

やっときた。

ずっと、動いていた信士には待ち時間は普通より長く感じた。

さすが、二区だけあってみんな三年生と思われる人達ばかりだ。

でも、その中にはやはり、

「水時」

人混みの中に見つけた、ライバルの名を呼んでみる。

しかし、水時は聞こえているのか聞こえていないのか、反応がない。

信士が不思議に思っていると、

「伊達君」

振り返るとそこには、沢村先生がいた。

「こ、こんにちは」

「今、水時に話しかけても無駄だぞ」

「？」

「あいつは試合前、いつもああやって集中力を高めるんだ」

「まあ、今日は去年の事があるからさらにだかな…」

去年の事…。

例の水時の負けられない理由。

「そういえば、前に父について聞いていましたよね？」

「伊達正信…これが、父の名前だそうです」

沢村先生は少し間を置いた後、答えた。

「昔、わしは高校の教師をしていたな」

「その時、見た長距離選手の中でもずば抜けて速い選手がいた」

「でも、その選手はある日、急に刑事になると言って陸上を辞めた…」

「今は伝説と言われている選手だ」

信士は驚いた。

まさか、父さんも同じ陸上をしていたんだ…。

「一位、北星!!」

もう、一位の選手が来たようだ。

と、信士が道路を見た瞬間、とんでもない光景が飛び込んできた。

柊君…。

なんと、柊は一位の北星中の選手に続く集団の中にいる。

ざっと見ると7番目辺りだろうか。

信士は堪えきれなくなり、道路に出て叫んだ。

「柊、ラストスパート!!」

勢いの余り、呼び捨てで呼んでしまったが、今はそんなことどうでもいい。

「頑張れ!!」

笑ってる…。

柊は柔らかい笑顔で最後のスパートをかけている。

「頼んだ…」

「うん!」

この時、6位。

柊はとんでもない大仕事をやってのけた。

柊の思いを受け取り、信士は哲の待つ、三区へ走り出したのだった。

第48話・二区の意地・

苦しい…つらい…。

でも、足は進む。

今、何番目ぐらいだろう。

自分の走りに必死すぎて、他が見えなくなってたからわかんないや。

柊は必死にこの集団についてきている。

そんな、柊の目にゴールラインが見えた。

そして、そこには、

………信士君。

「柊、ラストスパート!!」

あっ…今、初めて呼び捨てで呼んでくれた。

「頑張れ!!」

分かってるよ…。

今、繋ぐから。待ってて。

ここが、僕の居場所なんだ。

ずっと、ここにいたい！

「頼んだ…」

「うん！」

柊は自分の居場所を見つけ、体力を使い切り、地面に倒れ込んだ。

絶対に勝つ！

信士は柊から受け取った、たすきを肩に掛け、集団の中を走っている。

五、六区の一年生には負担をかけられない。

前半で前に出るんだ。

二区の山場である坂に差し掛かったところで信士はスピードを上げた。

エースが集まる二区だけあって、なかなか差は開かせてもらえないが、信士は集団の一番前へ。

坂の後半には、2、3人が集団から離されていつている。

前に…前に…。

前に出ようと、何度も試みるが、なかなか出してもらえない。

そんなとき、ふと沢村先生の話が浮かんだ。

…父さんもこうやって、苦しい走りを走り切ったのかな。

伝説、かあ。

凄いな、辞めても尚語り継がれているんだ。

ぼくも、造りたいな。

きつと、水時に勝ってぼくもいつか…。

…いつか？

いつかっていつだよ？

今すぐにでも掴みにいくもんだろ！？

一位。

一位を掴むんだ。

ぼく達はこの大会で伝説を造る。

信士はさらにスピードを上げた。

近くの選手達が慌てたようについてくる。

もう、集団は半分ぐらいしかない。

坂を登り終え、後は平坦な道が長々と続く。

ついて来れた、全員がこの道を最後の力を振り絞り走っている。

負けたくない。

ぼく達はみんなで一位をとるんだ。

信士の視界の中に哲が見えた。

ラストスパート。

もう、水時はとっくに着いたのだろう。

「哲……」

「任せろ」

頼もしい部長の背中を見送り、信士が脇の沿道を見た瞬間、

「え……？」

そこには顔をしかめ、膝を押さえて倒れている水時の姿があった。

第49話 - 懸ける思い -

立ち上がれないでいる水時。

と、すぐに北星中の生徒達が集まり、水時を運んでいく。

一体、何があつたのか…。

信士にはわけもわからず、立ち尽くしていた。

まったく…。

とんでもないところに来てしまったな。

スピード勝負の三区を走る哲は必死の走りが続けていた。

あいつ、自分のやったこと分かってんのかよ。

二区から三区へ渡るその時。

信士が哲へたすきを渡したときの順位は2位。

信士はあの二区の中で、それだけの力を出し切ったんだ。

正解だったかもな。

この場所に来て。

あの日、信士と声がかぶってしまったあの時。

あの時、哲は「長距離をさせて下さい」と言おうとした。

でも、やっぱり俺には無理だな。

ここで戦い続けることは俺にはできない。

だからこそ、このあいつらとの最後の走りに全力を尽くす。

最後まで。

他の選手もスピードを上げて走っている。

俺で順位は下げられない。

いや、少しでも北星中に近づく。

哲はギリギリまでスピードを上げた。

「ぐ、ぐうう……」

北星中のテント。

仲間達に運ばれ、水時は膝の痛みにもがきながら痛みを堪えている。

「いつからだ？」

「ええ？」

「いつから、痛みを堪えてたと聞いているんだ。今に始まったことじゃないんだろ？」

さすがだな…。

「合宿が、終わったあたりからです…」

「病院には行ったのか？」

沢村先生はため息をつきながら言う。

「…行かなくても分かります」

そう言つて、履いていたジャージのズボンの裾を膝の上まで上げた。

「……オスグッドか」

水時の膝からは異常な程に骨が飛び出している。

そもそも、競技場や校庭を走るのとは違い、道路のような堅い道を走るのは膝に相当、負担がかかる。

水時はこの駅伝の為に痛みを耐え、走り続けていたのだ。

「まあ…終わるまで、もってくれて良かったですよ…」

「バカが…」

「もう、誰もお前に文句なんか言えんよ」

「お前は走りきったんだ、後はしばらく安静にしろ」

「はい…」

「区間１位」

「え？」

「お前は区間１位だ」

水時はやっと、少しだけ安堵の顔を浮かべた。

しかし、言うべきか。

まさか、あの小僧が区間２位までくい込んでくるとは。

いずれ分かることとはいえ…。

「信士は…」

「伊達は、どうだったんですか？」

「！」

面白いかもしれない。

天才ランナーと伊達の子供。この2人の決着を観てみたい。

沢村はそんなことを思いながらも、水時に話し始めた。

第50話・優しい言葉・

あと、もう少しだ。

息を切らしながら走る、哲。

限界が近づき、スピードが落ちそうになる。

順位を守っていた、2位も後ろからくる選手達に抜かされそうだ。

俺はここまでだな…。

哲に四区、浩太が見えてきた。

きつと、今日までのこの期間はこれから生かされる。

無駄じゃなかったはずだ。

「お疲れさん！」

「頼む…」

抜かされる寸前でたすきを浩太に渡し、哲は長距離として最後の走りを終えたのだった。

負けたくねえ！！

周りの奴ら全員、蹴散らしてやる。

浩太は哲にたすきを渡されると同時に猛烈なスピードを出して走り出していた。

柊も信士も哲も、みんな頑張ってここまで繋いでくれたんだ。

絶対1位をとる。

1年生の竜太と智には、少しの差じゃあキツすぎる。

オレで勝負なんだ。

オレが北星中抜かさなきゃ。

オレが…オレが…

その頃

「栄二」

選手達の為の冷たいスポーツドリンクやタオルを用意していた栄二は、同じ1年生の竜太と智に呼ばれ振り向いた。

「どうした？てゆうか、そろそろ集められんじゃないのか？」

「あ、ああ…そうなんだけどさ…」

「栄二…オレら頑張るからさ、お前の分まで…」

2人は少し恥ずかしそうに俯く。

「！」

「なに、クサイこと言っただよ…」

栄二は溢れ出しそうな涙を堪え、それを隠すためにクーラーボックスを整理するフリをして、2人に背中を向ける。

「だよな…なに言っただろ」

「まったくだよ…」

やばい。

涙、出そうだ。

「ほら、そろそろ行かないと遅れるぞ」

「ああ…そうだな、じゃあ行くよ…」

歩き出す2人。

栄二はなんとか出せた声で、

「頑張れ…」

そう、2人に言った。

聞こえなかったのか返事は無かったが、振り返ってみると、2人の背中が遠くに小さく見える。

みんなと一緒に走りたかったな…。

閉じ込めていたはずの思いが溢れ出す。

あいつらと一緒に…。

『栄二だけをおいてくようなことは絶対にしないよ』

あの日の信士の言葉が心に響く。

「くうう…」

涙がただ、ただ流れ出し、仲間の優しい言葉が心に入ってくる。

良かったんだ…。

これで、良かったんだ。

この場所でみんなを見届ける。

それが、オレの仕事なんだ。

栄二は涙を拭い、荷物を持って仲間の集まる、ゴールへと走り出した。

第51話 - 焦り -

オレが…オレが…

浩太は焦り、いきなり、スピードを上げてしまっている。

まだまだ、登り道は続く。

が、とにかく集団から離れたい浩太はそんなことも気にせず坂を駆け上がる。

自分の体力の消耗にも気づかずに。

「あつ、柊君！」

体力も回復し丁度、浩太を応援に行こうとしていたところに声をかけられた。

あ、信士君…！

さっきは、呼び捨てで呼んでくれたけどやっぱり、たまたまだったんだ…。

柊はなんだか少し、寂しい感じがしたが、気にせずに明るく振る舞う。

「信士君、どうだった!？」

「ああ…、一応2位で渡せたよ」

「やったあ!」

普通なら喜ぶはずなのになんとなく信士は浮かない顔をしている。

どうしたんだろう…？

柊は疑問に思ったがそこには触れない。

「ねえ、浩太君の応援に行こう」

「うん、そうだね」

そう、淡泊な会話を交わし、四区の後半地点へ急いだ。

「……!？」

2人は着いた瞬間、焦った。

浩太はフラフラになり、スピードが落ちているのだ。

後ろから来る集団が浩太に迫っている。

状況を見ると、おそらく浩太は前半で飛ばし過ぎてこの後半でバテてしまっている。そんなところだろうと信士は思った。

「浩太ー！頑張れー！！」
「もうちょっとだよー！！」

2人は必死に叫び、浩太を応援する。

しかし、浩太は懸命に前へ進もうとするが、なかなかいつものスピードが出ない。

後ろの集団がついに、浩太のすぐ後ろまで迫る。

2人はただ、応援を送り続けるしかなかった。

ちくしょう…。

なんだって、こんなときにオレってやつは。

浩太は重たい体を引きずるように走っている。

前半を飛ばした分、差はそれなりにあるが、こんなスピードじゃ先が思いやられる。

ヤバイ。

後ろの奴らが見えてきた。

負けたくない。
勝ちたい。

1位を取りたい。

それなのに。

ちくしょう…。

だんだん、集団が迫ってくる。

浩太が覚悟した、その時。

「浩太ー！頑張れー！！」

「もうちょっとだよー！！」

聞こえた、仲間の声。

第52話 - 後悔と悔しさ -

信士…俊哉…！

2人は必死に声を出して、応援してくれている。

オレは…

カツコ悪い。

みんな、ここまで頑張ってきたのに。

バ力野郎。

後ろの選手が今にも抜かそうと迫っている。

嫌だ。

抜かされたくない。

嫌だ嫌だ嫌だ。

浩太はなんとか力を振り絞り、集団の1番前を保っている。

『抜かされたくない』

この思いだけが、力となり、足を前に運んでいる。

「浩太頑張れー!!」

「そろそろ、竜太見えるよー!!」

もうちょっとだ…。

ついに五区、竜太が見え、最後の直線になった時。

そんな…。

他の選手達が一斉にラストスパートをかけた。

当然と言えば当然だが、浩太にはもはや、そんなに残ってはいない。

「ごめん…」

「お疲れさまです!」

5位。

浩太は順位のキープに失敗してしまったのだ。

バタッ

浩太は力尽き、地面に倒れ込む。

信士と柊が慌てて、浩太に駆け寄る。

「ごめん、みんな頑張ったのに…オレは…」

「そんなことないって！浩太は頑張ったよ！」

2人は励ますが、浩太は自分を責め続ける。

「ちきしょう…ちきしょう…うう…」

「浩太…」

悔し涙を流す、浩太。

2人にとって、こんな浩太の姿を見たのは初めてだった。

まだだ。

まだ、終わってはいない。

五区を走る、竜太は5位をなんとかキープしながら走っている。

栄二の為に、絶対に勝たないと。

竜太は必死に走る。

走るが、周りの選手達にはなかなかついていけず、離されそうになる。

苦しい。

他の選手達がどんどん離れていく。

ごめん…栄二……。

結局、竜太が走り終わった時点で、9位。

六区、智も、順位を4つ落とし、鷹谷中の記録は13位に終わったのだった…。

「ノエル、どうだ？日本人の走りは」

「まあまあダネ」

「水時ってやつも、もう少しオモシロイやつだと思ってたんだケド」

「膝をケガするようなバカじゃ、ボクには勝てないネ」

「タダ…1人、オモシロそうなのを見つけたヨ…」

そう言い、ニヤリと外国人のノエル・アンソニーは不敵な笑みを浮かべた。

第53話・ノエル・アンソニー・

「二区、区間2位、伊達信士」

台の上に登る信士。

1位で台に登るはずの水時の姿がない。

やはり、何かあったのか…。

信士は表彰式の間、ずっと浮かない顔をしていた。

「あつ、信士君」

駅伝からの帰り、話しかけてきたのは東條。

「東條君、水時は!?!」

とつさに声が出る。

「そのことと…もう一つ話しておきたいことがあるんだ…」

そう言い、東條君は電話番号とメールアドレスが書かれた、紙を渡してきた。

「これ、オレのケータイの番号とメアド。家に帰ったら電話して」

信士は状況が読めず、

「…わ、分かったよ」

そう答える。

「じゃあ、後で」

そう言っただけで東條は走っていく。

信士は、わけもわからずその場に立ち尽くしていた。

プルルルル…プルル…

“はい、もしもし？”

東條君の声が聞こえる、一応かけ間違えてなかったようだ。

「もしもし、東條君？信士です」

“ああ！信士君、待ってたよ！”

元気よく、東條は言う。

“本題に入るけど、まず、走はオスグットだった…”

オスグット……。

膝を抱えていたのはその痛みだったのか。

水時は今回の駅伝に全てを賭けてたんだ。

“それでさ…秋の新人戦、走はどうやら絶望的らしいんだ……”

「えっ……？」

水時が秋の大会に出れない…。

信士にとって、それを理解するのには時間がかかった。

「そ、そんなに、ひどいんだ…」

“うん…随分、無理して走ってたみたいだからね…”

「……………」

“それでさ、もうひとつ話があるんだ”

“夏休み明けから、ノエル・アンソニーっていうやつが、同じ市内の広山中に来たらしい”

“で、これが凄い長距離ランナーらしいんだ”

「でも、そんな人、駅伝にいた？」

確か、見た範囲では外国人はいなかったはず。

“どうやら、まだ体が出来上がってないとか言って、今回はどこかで見学していたらしいよ”

体が出来上がってない？みんな中学生なんだから当たり前のことじゃないか。

“でも、まあいずれにせよノエルは秋の新人戦には出るはず”

“そこで、走抜きでも、日本人の走りを見せてやろう！”

第54話 - 3分の2 -

ノエル・アンソニー、

か。

「分かった、秋の新人戦に向けてお互い頑張ろう!」

“ うん!! ”

「陸上部集合!!」

いつもの、部長に戻った哲の声が響く。

「長距離は外周!」

いつものように走るが、浩太には笑顔がない。

朝の駅伝の報告会でも、「資格がない」って言って発表を避けてたしなあ。

浩太が前に立ちたくないって言うもんだから、ぼくは記憶喪失で、柊君は来たばかりだから、という理由で結局、哲が結果を報告した。

やっぱり、気にしてるのかな…。

「浩太、伊達、柊、ちよつと来い！」

練習の終わり、3人だけが九条先生に呼ばれた。

「駅伝も終わったばかりだが、後1ヶ月ちよつとで秋の大会だ」

「そこで、種目を考えていかなければならないのだが…」

「1500には2人しか登録する気ない」

2人、だけ……。

「それって……」

「ああ、1人は別に回ってもらう」

そんな…。

この中から1人が、別になるなんて。

浩太が明らかに動揺した様子で言った。

「1500じゃなくて、800になるってことですよね？」

「ああ、そうだ。だが、長距離なら、1500で走りたい。そうだろう？」

3人は黙り、おそらく同じことを考えているだろう。

昨日まで、一緒に戦っていた仲間と争うことになるなんて。

「1ヶ月後、大会の登録期限ギリギリに3人で1500メートル走で競争をして、そこで決める。それでいいな」

よりによつて、この2人と…。

3人は全く同じことを考えている。

「それから、信士」

「お前は、記憶をなくす少し前、長距離になりたいと言ったとき、オレとある賭けをした」

賭け…？

信士はもちろん覚えていない。

「オレはあの時、お前に秋の新人戦までに長距離のやつら全員を抜かせ。これを条件にした」

「つまり、お前は1位じゃない限り、短距離に戻ってもらう！」

1位でなければ、短距離…？

そんなバカな。

この勝負、勝たないと全てが無駄になるって言つのか。

……勝たないと。

この瞬間から、3人の間には冷たい何かが入り込むようになった。

第55話・戦いの終わり、そして始まり・

「ねえ、柊君って駅伝のとき凄かったんでしょ!？」

クラスメイトの女子達が昼休み、柊の周りに集まる。

「い、いや…そんなことないよ…」

顔を真っ赤にして、答えている柊。

「柊君、顔真っ赤あゝ!かわいい」

はやしたてる女子達。

柊君は顔を真っ赤にしたまま俯いている。

そんな光景とは裏腹にそれを悔しさに満ちた顔で浩太は柊を見つめていた。

駅伝。

あの時の失敗。

浩太は多分これからずっと抱えていくんだろう。
水時みたいに。

でも、あれは浩太だけのせいじゃない。

何度そう言っても浩太の心の中には悔しさは在り続ける。

たった一度の失敗なのに。

「そうだ、圭太」

「ん、なに？」

「今日さ、一緒に帰らない？」

「いいけど…お前、いつも浩太と帰ってたじゃん」

そう、いつもは一緒に帰っていたのだが。

昨日のあのことがあってから、いや、駅伝が終わってから浩太が浩太じゃなくなってしまった。

「そうなんだけどさ…」

「ふーん…」

その後、なにかを感じ取ったのか、圭太はそれについてなにも聞いてこなかった。

面白い…。

俺は今回の駅伝、目標を20位以内と言った。

そして、あいつらは13位と目標を大幅に超えて見せた。

なのにも関わらず、あいつらは誰一人喜ばず、ただ悔しそうにして
いたんだ。

毎回毎回なにかあるたびにあいつらはなにかをやらかしてくれる。

でも、今回はどうなるかな？

俺が出した無茶苦茶な難題。

これ乗り越えたやつにだけ勝利は見える。

あとは、誰が落ちるのか。

俺はあとそれを見届けるだけだ。

九条は1日の仕事の資料を片付け、陸上部員の待つ校庭へ出ていっ
たのだった。

「おう、終わった？」

帰ろうとしたところに、圭太がいた。

どうやら、待っていてくれていたようだ。

「じめん、遅くなった」

「いいや、別にいいよ」

圭太は不思議な人だ。

野球部である圭太にぼくがシニアを辞めたという知らせが入った時間でさえ、「生きてただけで良かった」と言っただけで勧誘はしないでくれていた。

普通なら、活躍していた選手を欲しいと思うはずなのに…。

本当に圭太は友情を大切にする人だと思う。

でも、こんなことを思うのは失礼なのかもしれないけど、

やっぱり…

帰り道は浩太と歩きたい。

第56話 - 闘いの火蓋 -

「信士、やつぱりさ、浩太最近変だよ…」

あの出来事から5日、陸上部の練習が終わり帰るときに詩織に言われた。

「…分かってる。でも、ぼくらは今、争っているんだ」

「辛いけど…今だけは、ダメなんだ…」

詩織は少し、悲しそうな顔をしながら、

「それでも…変なもんは変だよ」

「浩太が元気ないのも、もちろんのことだし…柊君まで最近、余計おどどするようになったじゃん…」

確かにそれは信士も感じるところではあった。

「それに、3人が一緒にいないなんておかしいよ…」

「……………」

分かってる。

分かってることなのに…

どうしても、争わなくちゃならない。

それぞれに負けたくない想いがあるから。

次の日

昼休みの時間、柊は立ち上がり、浩太が座っている机の前に立った。

「浩太君…僕はもう、こんなのやだよ…」

「浩太君と信士君と一緒に笑っていたい…だから、僕は降りる。もう…耐えられないんだ…」

その瞬間、

「ガタン！」と椅子が倒れる音が鳴り響き、浩太は柊の頬を思い切り殴った。

あまりの強さで、柊はそのまましりもちをついてしまっている。

「ふざけてんじゃねえー!」

この状態に教室にいた全員が困惑し、どうしたらいいか分からなくなっている。

「もう耐えられない?ふざけたこと言ってんじゃねーよ!お前の思いがそんなもんなわけないだろ!」

「いらねえ情をかけんなよ!!」

「いいか、見とけ。絶対にオレはお前らに勝つ!勝って、絶対にリベンジしてやるんだ!!」

そう言い、浩太は教室を出て行ってしまった。

柊は殴られた頬を抑え、俯いている。

信士は慌てて柊に駆け寄る。

「だ、大丈夫!?!」

「うん…大丈夫だよ…」

「いてて…」

殴られた頬はとても痛そうだ。

「信士君…」

「やっぱり、浩太君は浩太君だったね。浩太君には嘘をつききれないや…」

やはり、嘘だったのか…。

「でも、3人でいたいのは本当だよ…でも、浩太君が言った通り試合には絶対に出たい!」

「信士君、悪いけど…君にも負けないつもりで頑張るよ」

「臨むところだよ……」

これこそが、真の闘いの火蓋が切って落とされた瞬間だったんだ。

あと、2週間ちょっと。

全てをかけて闘いに挑む！！

第56話 - 闘いの火蓋 - (後書き)

すいません

テスト近いんでちょっと休みます

勉強に悩む中学生を

応援よろしくお願いします

第57話 - 当たり前 - (前書き)

お久しぶりです

これから、

また、よろしく

お願いします

第57話 - 当たり前 -

状況はまるで変わってしまった。

3人はそれぞれに「負けたくない」その思いでひたすらに走り続けている。

でも、更に変わってしまったことは、なんと言っても、3人が部活に來なくなったことだろう。

來なくなったと言っても、サボりとかではなく、それぞれに自分のメニューをするため。

それを知らない部員達の間では

『先生から、無理なことを言われからボイコットしている』
など、いろいろな噂が立ち初めていた。

「宮嶋」

「なに？」

いつもどおりの練習を終え、帰ろうとしたとき、詩織は哲に呼び止められた。

「お前、長距離の3人がどうして來てないのか知ってるか？」

詩織は迷った。確かに信士から理由は聞いていたが言うべきか。

いくら部長とは言え、なんとなく言っではいけないことのように。

「……ううん、なんにも聞いてないよ」

「…そうか、ありがとう。気をつけて帰れよ」

そう言い、哲は歩いて行く。

短い間とはいえ、3人と関わった者として、心配なんだろうなあ。

詩織はそう思った。

…あと一週間かあ。

1人は1500から外されてしまう。

それも、信士は1位じゃなきゃいけない。

3人とも頑張ってほしいけど…。

信士…。信士には残ってほしい。

『約束』叶えてもらわなきゃいけないんだから。

もう、秋となった空は赤く、広がっていた。

1週間後

久しぶりに部活にでた3人は気合いの入った表情を浮かべている。

「陸上部、練習ストップだ！」

3人以外の部員達が全員、トラックから外に出される。

「おい、位置につけ」

呼ばれたが、3人とも動こうとしない。

…位置に着いたら、始まってしまう。

『仲間』である3人にとって、1人を蹴落とすのはとても辛
いこと。

それは、3人とも、同じ気持ちだった。

「信士君、浩太君…あのさ…」

そんな中、柊がふと、口を開いた。

「どんな結果になっても…僕たち『仲間』だよね…」

「「！」」

一番、聴きたかった言葉。そして、一番、確かめたかったこと。

3人は顔を見合わせ、

「…当たり前だろ！」

友情を確かめ合い、意を決した3人は、スタートラインに立ち、スタートの合図を待った。

第58話 - 速攻 -

「位置について、よい…」

パンッ

九条先生の手を叩く音と同時に3人は一斉にスタートした。

秋の新人戦、1500メートルの選手枠を賭けた闘い。

3人共、この闘いには負けるわけにはいかない。

と、いきなり浩太がスピードを出し2人の前に出た。

これでいい…

これでいいんだ。

スピードを上げながら、1人黙々と走り続けた練習を思い出す。

……「はぁ…はぁ…」

浩太はいつもどおりの道を走っていた。

しかし、駅伝での失敗を踏まえ、体力を残しながらの走り。

ゴールの公園までの最後の直線。

浩太はスピードを上げようとした。が、しかし

あれ？

スピードが上がらない。

体力は確に残っている。なのに、足が思うように進まない。

結局、そのままゴール。

なぜ、スピードが上がらなかったのか、考えてみる。

なんでだ。

オレの勘違い？

いや、違う。スピードが上がらなかったのは確かだ。

じゃあ、なんで…。

最初からスピードを出して走っていても、体力を残そうとして走ってもダメなんじゃどうしようもないだろ。

そもそも、体力なんて残そうとして走ったことないしな。

信士と柊はどうなんだろう？

いつもなら、普通に聞けるはずなのに。

ん？待てよ。じゃあ、それって、体力残そうとして、走ったことないからなんじゃ。

そうか、慣れないんだ。

と言っても、あと5日。時間は無いしな。

ならやつぱり、自分の走りをするしかねえや。

前半で決めて、後半を逃げ切る。

それで、走る。いや、それしかない！

1500メートルは学校のトラックを7周半。

いきなり、勝負に出た浩太は2周目にして、2人に差をつけることに成功している。

もつとだ。もつと差、つけないと。

スピードを全開にして、走りつづけた、浩太は遂に4周目も過ぎた辺りで少し、スピードが落ちてきた。

しかし、2人との差は半周近く。

いける。

浩太は逃げ切りの体制に入った。

始まっちゃった…。

3人がスタートラインに入るのを不思議そうに見ている、陸上部員達に紛れて詩織は複雑な心境でその姿を見守っていた。

その3人の走りも4周目を半分以上を過ぎたあたり。

「すげーな、浩太」

「駅伝では、失敗したとか噂あったけど嘘じゃない？」

なんて声があちこちから聞こえてくる。

確かにぱっと見れば浩太の圧勝に見えるかもしれない。でも…

その時、

後ろを走っていた、柊が凄いスピードで追い上げ始めていた。

確かにぱっと見れば浩太の圧勝に見えるかもしれない。でも…

その時、

後ろを走っていた、柊が凄いスピードで追い上げ始めていた。

第59話 - 攻める -

はあ…はあ…

浩太、凄いな…。もう、あんな遠くに。

4周目を走り終えたところの信士は柊と並び走っていた。

でも、浩太がいつまでも体力が保つとは思えない。

ここは、耐えるべき。

しかし、半分を過ぎた辺り、柊は急に

「…耐えてばかりじゃ勝てない。攻めなきゃ勝てないんだよ」
そう信士に言い残し、スピードを上げ、信士から離れていった。

『攻めなきゃ』か。

あのびくびくしていた、柊にそんなことを言われるとは。

でも、そのとおりだ。

柊があんなに『攻めて』走ってる。ぼくは、もっと攻めて走らなきゃ勝てない。

出遅れた伊達。差は2人と随分離れてしまった。残りは2周。

2位じゃ駄目なんだ。1位。ここで勝てないようじゃ、水時に勝つ

なんて絶対無理だ。

どんな結果になっても仲間。誓ったんだ。

勝つ。勝ちたい！

あ…

この感じ。そうだ…合宿のときと同じ感覚。

信士は離れてしまった差を取り戻すべく、スピードを加速。

残り1周。前方で柊が浩太をついに抜かしたのが見える。

追いつけるか。

浩太まであと少し。

限界まで、限界までスピードを上げる。

浩太を抜かし、あと半周。柊までもあと少し。

信士は全力疾走。ゴールまであと少し。

あと少しなのに…

白線で引かれたゴールライン。

そこで立ち止まっている柊の姿が見えた。

間に、合わなかった…。

信士は落胆を隠せない様子でゴール。

信士の中でいろんなことが崩れていく。

水時とのこと

ノエル・アンソニーと東條君とのこと

悔しくて…情けなくて…涙も出なくて…。

そんな中、九条先生の声が聞こえる。

何か言っているのは分かるが、何を言っているかは分からない。

それほど、信士はどん底にいる。

「おい…おい…信…」

「おい！信士！！」

信士はうつろな目をしたまま振り向いた。

「お前は1位だ。このまま長距離を続けていい」

え……………

なにを言っているんだ。

さっき、柊が先にゴールして…。

「柊は2位だ。まあ、どうゆうつもりか知らないが」

信士は、はつとして柵の方を向いた。

まさか……

第60話 - 友情 -

まさか……

「ゴール寸前で止まったのか…」

信士は気づいた。柊はゴールの寸前で立ち止まり、信士が1位でゴールするように図ったのだ。

「なんで…こんなことを…」

「こんなの、正しい結果じゃない！長距離からいなくなるのは、ばくだ！」

信士は九条に向かって、懸命に説得しようとする。

こんなのは違う。実力じゃ負けたんだ。

「だから…」

柊がなにか呟いた。

「だから…言ったじゃないか…どんな結果になっても仲間って…」

そんな…そうか、柊は最初から分かってたんだ。
こうなることも、ぼくの中にまだ迷いがあったことも…。

「信士君は走らなきゃ、駄目だ！聞いたよ…約束があるんでしょ？」

「けど…けど、ぼくは…」

「走れよ」

浩太が言った。

それは、いつもどおりの浩太の声で、まるで自分が1500メートルで走れないと分かった人の声には聞こえなかった。

「これが、正しい順番だ。オレの走りじゃ通用しないよ」

今度は少し悲しそうな声で、でも、確かに強い、いつもの声。

「そんなことはない」

今度は九条先生。

「今日、はつきり分かった。俺はお前の適性を見誤っていたんだ」

「浩太、お前には800の方が合ってる。」

浩太はまだ、悔しさを残しながらもでも、報われたような、これだよかったような…。

「それから、信士。実力ではないが、約束通り1位は1位だ」

「終に…仲間に貰ったチャンスを生かすも殺すもお前次第だからな」

「以上、これで秋の新人戦前のテストは終わりだ」

終わったという安堵感。そして、柊に貰ったこのチャンスの重み。
でも、3人にとってはそれ以上に…

友情を守りきったことの方が何倍も大きいのだった。

そういえば、柊君はどうして『約束』のこと知っていたんだろう？

でも、まあなんでもいいや。こうして戻れただけで。

それだけで…。

- 1日前 -

「柊君、ちょっといい？」

夕焼けの下、いつものように自主練習をしていた柊は詩織に話しかけられた。

「あれ、宮嶋さん。部活は？」

「ああ、いいのいいの」

詩織はニコニコした笑顔を浮かべたあと急に真面目な顔をし、

「それよりも、明日のことについてなんだけど」

「信士が記憶喪失なのはしってるよね？」

「う…うん」

「それでね、信士には水時っていう人との大事な約束があるの」

「その約束が果たされれば、きっと信士の記憶は戻る」

「約束…って？」

柊は詩織の言う、約束によって信士の記憶が戻るのなら、どんなことでもするとすでに決めていた。

水時という名前は知っている。確か、とてつもなく速いって噂の。それが信士になにか関係あるのか？

「陸上の大会…中総体で競い合うこと」

「お願い！信士を救ってあげて。明日、多分、信士は2人と争うことをためらっていい走りを出来ない」

中総体で争う…そのためにはここで諦めるわけにはいかない。

諦めればきっと、記憶はずっと戻らないまま…。

「信士にはどうしても、『約束』を…記憶を思い出してもらわなきゃいけないの…」

第61話 - 秋の新人戦 -

ブウーブウー

秋の新人戦まで3日に迫ったその日、信士はケータイの着信音に気づいた。

『メール 1件』

メールだ。誰だろ？

『受信ボックス 1件』

『郷田洋介』

洋介から…。

洋介といえば信士が記憶を失う前、野球をしていた頃の相棒。

何の用だろう。野球を辞めることなら形はついたはず。

恐る恐るメールを開いてみる。

『信士、久しぶり。俺たちはこの秋の大会、信士抜きでも優勝することができた。今日はそれを報告するためにメールしたんだ。だから、信士も俺たちのこと心配しない（心配なんてしてねえか笑）で頑張れよ。』

応援してる』

洋介……………。

頑張らないと。本当にぼくはいろんな人に助けられてばかりだ。

『おめでとう。ぼくも頑張るよ』

そう返信を打ち、信士はランニングに出かけたのだった。

- 光騎中学校 -

「調子はどうだ？ノエル」

「アア、荒木サン。絶好調ですヨ」

練習中、光騎中陸上部の顧問、荒木は期待の外国人、ノエル・アンソニーのことを気にかけていた。

この前の駅伝、ノエルはコンクリートの上を走るのは、膝に悪いと言って走らなかったからである。

荒木としても、ノエルには走ってもらいたい。しかし、ノエルのこのわがまま過ぎる性格は荒木だけでなく、他の部員たちも手を焼いていた。

部活は真面目にしない。無断でサボるなど、酷いものだ。

それでも、走り出したノエルの姿を見たものは何も言えなくなる。

「去年の水時のタイムは何分デスか？」

「ええっと…確か、4分40だ」

ノエルはニヤリと笑みを浮かべ、

「ヨユウだね、じゃあ今回はそれぐらいにスルヨ」

「ジャア、いつもどおり、自分のトレーニングをするマス」

そう言い、他の長距離メンバーとは違う、ノエルの自分で作った練習を勝手に始める。

「それぐらいにする」か…。

ノエルの見せる才能、いや、生まれながらに持った力はどんな努力も及ばない。

外国人の持つ、才能の差はどんなに日本人が頑張ったって適わないのだ。

あの水時でさえ…。

ゴムでできた、1周400メートルのトラック。その周りでは人工芝が緑色にきれいに光っている。

「ついに来たな…」

さらにその周りの観客席、その一部を陣取ったところで浩太が呟いた。

「うん」と相槌を打ちながらも、自分がここで走るんだと思うと信士は緊張からかなんだか上の空だ。

なんてきれいなところだろう。

土がない。青いゴムのトラックの上を走るのだ。それも、多くの中学生が押し寄せるこの舞台で。

そんな中、信士の視界に気がかりな人物が入ってきた。

背が異常に高く、何よりも派手過ぎる金髪。

信士は確信した。間違いないあの人だ。

ノエル・アンソニー…。

第62話 - 大会の様子 -

ノエルは競技場の中央辺りでなにかを誰かと話している。

“日本人の力を見せてやろう！”

東條の言葉が信士の中に響いた。

この大会、誰にも負けたくない。

ノエルにも東條君にも柊君にも…。

水時にも…。

「鷹谷中集合！」

哲の声。部員達は走って九条のもとに集まる。

信士も急いで円の中に加わる。

「今日の試合だが、9時半から100……………2時から1500だ」

秋の新人戦は、3日間かけて行われる。

「今日は特に応援が多いと思うが手を抜かずにするように」

「はい！」

「それから、今日試合に出るやつは前にも言ったが間違えないように組などを確認しておくように」

信士の組は2組目。選手名の中にはやはり水時の名前はない。

柊は3組目。ノエルは1組目だ。

今の時間は8時50分。9時半からは100メートルの選手である詩織の応援がある。

早くも緊張気味の柊と浩太と喋っているうちに9時半になった。

詩織は女子100メートル3組目。

2組が終わり、スタートブロックに自分の足の幅を合わせる詩織の姿が見える。

大会だというのに、心なしか詩織はずいぶんリラックスして楽しそうにしているようにも伺える。

「パン」という大きな音と同時に詩織はスタートを切った。

と、応援をしていた信士は啞然とした。詩織は楽々と1位で走ってきたのだ。

「なに、びっくりした顔してんだよ。まだ予選なんだから詩織にとっちゃふつうだぞ？」

隣で言う浩太の言葉を聞いて信士は思った。

もしかして、鷹谷中って実は凄いいんじゃない？

その後も鷹谷中は続々とそれなりの結果を出していく。

それは応援していても楽しくなるほど。しかし、大概の種目の1位は北星中が取ってしまう。

応援をしているうちにいつの間にか、アップの時間に。

「信士君、アップ行こう」

「うん」

競技場の脇にあるなかなか大きい公園、そこに中学生達が集まっている。

どうやら、ここがアップ場のようだ。

「とりあえず、走ろっか？」

2人はとりあえずいつものどおりのアップを始め、ストレッチをする。

「あの、キミ達もしかシテ、タカタニ中デスカ？」

と、そこに聞き慣れないぎこちない日本語が聞こえてきた。

2人は振り返るとそこには……。

「ああ!？」

ノエル・アンソニーがいた。

第63話 - 裏の顔 -

びつくりした様子の2人に対して、ノエルは

「ヤッパリ！ 駅伝大会での活躍みまシタ。あの走りは本当にスゴイとオモイマス」

明るく喋るノエル。東條から聞いていたコンクリートの上は走らないとか言う人にはとても見えない。

信士がそんなことを思いながら、ノエルの話を聞いていると、少しだけ気がかりな言葉を残した。

「ヒトリだけデス、日本人でスゴイとオモッタのは」

と、ここで柊が肘で信士を軽くつつきながら、

「信士君凄いや、認められてんじゃん」

どうやら、柊は凄いと思った1人の日本人をぼくだと思っているようだ。

しかし、

「それで、ドチラなんですか？ Mr・ヒイラギは」

2人は顔を見合わせ、柊は慌てて「ぼ…僕です」と答える。

信士はさつき柊がやってきたように肘でつつき返した。

「オオーキミでしたか！」

ノエルは目的の人物を見つけれとても嬉しそうだ。

「で、でも…なんで僕なんですか？他に僕より速い人ならいるんじゃない」

「北星中の水時さんとか…」

水時。この名前を出したことが柊のこの日の最大の失敗だった。

「あのヒトはダメです」

水時が駄目…？

「ワザワザ、足に悪いコンクリートの上をムリヤリ走って、ケガをするなんてバカだとオモイマス」

水時がバカ、だと？

水時が駅伝をどんな思いで走ったかこいつに分かるのか。

「それに比べてMr・ヒイラギの走りにはレイセイさをカンじまシタ」

「それに比べればカンジョウ的になってハシツテケガしたミズトキはバカです」

違う。水時は過去の自分の失敗を取り戻すために、仲間のためにケガを押して走ったんだ。こいつはそれを…。

もう、これ以上水時が汚されるのを信士は耐えられなかった。

「水時はバカなんかじゃない…」

「ン？」

「そうなるのを分かっているけれども、それでも…仲間のために走ったんだ！」

「…クツククツ」

なぜか、ノエルは笑い出す。

「それは、ナオサラバ力ですね」

なにを笑ってんだ。

かっこいいじゃんか、ケガを押してまで因縁を晴らして。

それをなぜ、笑う！

「笑うな！！」

気づいたときにはノエルに向かって叫んでいた。

でも、水時をあざ笑ったことはどうしても信士にとって許せない。

「お前に水時の何が分かるっていうんだ！水時はな…」

続けようとしたところで、

「Shut up!!（黙れ!!）」

凄い血相でノエルは信士を睨めつけてきた。しかし、信士も負けじと睨み返している。

ノエルはさっきまでとは違う、恐ろしい笑みを浮かべ言った。

「コウカイすんナヨ…」

そう、言い残しどこかに歩いて行ってしまったのだった…。

第64話 - 悪魔 -

「…絶対に負けない」

ノエルの背中が見えなくなった頃、信士が呟いた。

ノエルの実力がどれほどのものかは信士は知らない。

でも、水時をバカにするやつは許せない。

「柊君…アップの続きしよう」

「う…うん」

絶対に勝つ。

「1500の選手、番号順に集まれ〜！」

続々と集まる長距離選手たち。そんな中に2人はいた。

「じゃあ、後で」

ノエルと別れてからの信士は凄く不機嫌で、試合前の話もそれだけ。

九条先生に「予選なんだから体力はなるべく温存しておけ」と言われたときさえ、聞いているのか聞いていないのか分からないような

態度。

こんな、信士君を見るのは初めてだ。

3組目の集団にしながら、柊はそんなことを思う。

パン！

どうやら、1組目がスタートしたようだ。

やはり、先頭にはノエルがいる。でも、見るからに手を抜いているのが分かる。

だらだらとした走りで、楽々とその組で1位。この時点でノエルの準決勝進出は決まった。

やっぱり、なめてる。

柊もこのとき確信した。さっきまでの裏の顔。あの、悪魔のような走りこそが本当の顔なんだ。

そのとき、2組目もスタートをした音が響いた。

信士君は…。

やっぱり、本気だ。九条先生の話なんか聞いちゃいない。

でも、あれが信士君だ。いつも全力で。凄いスピードだ。

結局、信士はぶっちぎりで1位。柊も3組目で1位。

予選のタイムでは信士が1番速かった。

しかし、この日1番の衝撃は…。

「浩太、凄い…」

男子800メートル。浩太は予選タイムで2位にずいぶん差を付けて1位を取ってみせたのだ。

やっぱり、浩太には800があつてたんだ。そう思わざるえなかった。

2日目

この日の1500の試合は午前中から。そして、組み合わせは…。

「1組目、ノエルといっしょだ…」

準決勝にしてノエルとの激突。しかし、信士にとってはありがたかった。

「逆に後悔させてやる…」

そう、意気込み信士は昨日と同じく集合場所へ向かう。

昨日よりずいぶん減った人数。でも、信士にとってはそんなことは関係ない。

遅めにやってきた、ノエル。ノエルは信士をみると、

「モウ一度言う、コウカイすんナヨ」

「後悔するのは、君の方だ」

「…ならシネ」

それだけを言い残し、信士から離れる。

「そろそろだ…」

信士が思い腰を持ち上げると後ろから「信士君…」柊の不安そうな声が聞こえた。信士は手だけを振り答える。

スタートライン。信士は横を見るとノエルがニヤニヤしているのが見える。

なにが可笑しい…。

「パァン！」全員が一斉にスタートする。ノエルは、前回とは違い真面目には走っているように見える。

やっぱり、速い…！

でも、負けない…！

信士は必死についていく。

しかし、3周が過ぎたとき…。それは起きた…。

「…G o t o h e l l ! (… くだばれ!) 」

「えっ…」

ノエルの足が凄い速さで信士の足下に伸びてきた。

第65話・許さない・

「Go to hell！（くたばれ！）」

えっ？

凄い速さで伸びてきたノエルの足。走ることに必死だった信士は前に倒れる。

「コウカイすんナヨ」こうゆう意味だったのか。体が地面に吸い込まれていく。

あれ…。

この感じ、どこかで…。

“お前は成宮さんに逆らった。死ね”

なんだこれ…。

記憶……？成宮って誰だ？

バタッ

そのまま、信士は気を失ってしまった…。

あいつがノエルか…。

観客席。松葉杖をついてグラウンドを見ているのは水時。

準決勝。ノエルが信士と走る今回はノエルの本気が見れると思ったからだ。

しかし、スタートして2周半。水時はノエルの走りに違和感を覚えた。

なにかおかしい…。

確かに本気といえば本気。だが、なにかが。

なにかを狙ってるような…。

そして、3組目が過ぎたとき、信士は急に倒れた。

信士は倒れたまま立ち上がらない。周りは「どうしたのあの人」「急に倒れたよ」など騒然としている。

しかし、周りは気づいてないが、水時は気づいていた。

あの野郎、信士を転ばせやがったんだ。

許せねえ…。

「ちょっと、下行ってくる…」

いつしよに見ていた、東條に断りをいれ降りていく。

「あ、ああ…」

どうやら、東條は信士のもとに行くと思っているらしい。

でも、本当の行き先は…。

「おい」

多くの人がすれ違う中、立ち止まったのはノエル。

「てめえ、信士はめやがっただろ」

「サア、なんのコトかな？」

「お前だけは絶対に許さねえ」

するとノエルは笑いながら歩き出し、

「楽シミにしとクヨ、Mr・ミズトキ…」

それだけを言い残し去っていった。

……うう……うう……

視界がぼやける。なんだか、見たことのある天井。

ここは……。そうか。ぼくは病院に運ばれたんだ。

首を横に向けてみるとそこには、前と同じ様に詩織の姿があった。

でも、前と違うのは詩織が寝ていること。

軽く詩織の肩を叩いてみる。そういえば、詩織はいつでもぼくの心配をしてくれてる。

感謝しなくちゃ。

ガバッ！

詩織は飛び起きた。そして、信士をみるなり、

「信士、記憶は！？」

第66話・目覚め・

「信士、記憶は!？」

「え…? あ、ああ大丈夫だけど…」

記憶がまた無くなったんじゃないかと思われたのかと思った信士は
とっさに答える。

「そうじゃなくて、何か思い出した? ってこと!-!」

「えつと……」

言えない。駄目だCrowのことだけは誰にも言えつこない。

言ってしまったら、ぼくだけの問題じゃなくなってしまう。これ以
上、迷惑をかけるわけにはいかないんだ。

「いや…なんにも…」

だから、こつ答える。

「そつか…」

成宮…。あれが、本当に記憶だったのだとすれば、あの「逆らった」
というのは…?

「ところでさ…なんで詩織はここに? 新人戦は?」

「新人戦はもう終わったよ。信士は丸1日寝てたの」

丸1日…？そんなに寝てたんだ…。足をひっかけられて転けただけで…。やっぱりあれは…。

「それにしても、転けちゃうなんて運悪かったよね」

運が悪かった…？あれは、仕掛けられたことだろ？もしかして、あのことに誰も気づいていないのか…。

「あつ、ちょっと待ってて、鈴木先生呼んでくるから」

詩織の背中を見ながら、いろいろなことが頭をよぎる。

ノエルのこと。みんなの大会の結果のこと。そして、あの記憶のこと。

「…はい、……………えっ！？は、はい…お願いします」

詩織はケータイを切り、再び信士の方を向き、

「鈴木先生すぐに来るって。それから…水時が来てるって……」

「水時が！？…ってそっぴやなんで鈴木先生のケータイ番号知ってるの？」

「ああ、メル友だから。やたら、病院来ることが多かったからね」

「……………」

それから、3分後。水時は松葉杖をつきながら、鈴木先生の後ろを歩いてきた。

「気分はどうだい？」

最初に口を開いたのは、鈴木先生。

「普通です」

「そうか…もう、入院する事はないとは思っていなかったが、まさか転んでとはな…」

そう言いながらも、鈴木先生は記憶喪失が関係していることに気づいているようだ。

と、なると詩織ももしかしたら、気づいているのかもしれない思ったが、「打ち所が悪かったのかな？」という詩織の言葉でその考えはふりほどかれた。

「まあ、詳しい話はあとで聞くとして、気分も良さそうだしせっかく、水時君が来てるんだ水時君と話でもするといい」

そう言い、鈴木先生は病室を出ていく。

「じゃあ、私も売店でなんか買ってくるね」

詩織も空気を読んでか、病室を出ていく。

詩織が病室を出た後、少し間をおいて、信士が先に喋りだした。

「一体、何の用で来たんだよ？」

「……お前、足、かけられただろ」

第67話・宣戦布告・

「…うん…誰も気づいてないみたいだったけど…」

「ああ、あの足捌きは普通のやつには見えないだろうな。それに、あいつわざと見にくいように体を外側に出しただろ」

そんな中でかけられたことに気づいたのか…。さすが、水時だな。

それにしても…。

そんな、能力を持っているのなら、あんなことする必要ないだろうに。

「…それで決勝は、柊君は？」

「ノエルに負けたよ…結構差、ついてた。それに、4分40秒…春のオレと全く同じタイムを楽々走りやがった」

「多分、あれはオレへの宣戦布告だと思う」

「宣戦布告って、なにかあったってこと？」

「まあ…」

ノエルは水時にも近づいてきた…。あれだけ、酷く「バカ」呼ばわりしておいて…。

ノエル…。危険すぎるライバル…。いや、危険すぎる敵だ。

「それで、お前言わなくていいのかよ？」

「…なにを？」

「なにをつて足、かけられたことに決まってる」

確かにちゃんと確かめてもらえば、ノエルの反則行為を証明出来るかもしれない。でも、そうじゃなく実力で。来年…中総体だ。そこで、実力で証明してみせる。

今度こそ、日本人の力を見せつけてやるんだ。

でも、今の力じゃ勝てっこない。だからこそ。

「水時だって、膝に痛みあるのを黙って、走ってたじゃないか」

「？」

「実力で証明してみせるよ。来年の中総体、絶対に勝ってみせる。ノエルにも…水時にも！」

水時は軽く笑みを浮かべ、

「それだけ、聞ければ充分だ」

「？」

「ノエルはオレが潰す。もちろん、お前にも負けない」

「あばよ。次に会うのは、中総体。そのフィールドの上だ」

そう言つて、水時は病室を出た。

負けられない。中総体までここからが本当の勝負だ。

それから、詩織に聞いた話では、新人戦の結果は全体では4位。

個人では、哲が400メートルで2位。詩織は100メートル5位。柊が1500で2位。

そして、浩太が800メートルで1位と浩太が800にどれだけ向いているかが良く分かった。

この他に3人、入賞し、このメンバーは県大会へと出れるようだ。

仲間が活躍したことは信士にとってとても嬉しいこと。

でも、やっぱり、自分も県大会に出たかった思いは強い。

しかし、1番の目標は水時に勝つことだと思い直した。

退院は2日後。鈴木先生にやはりいろいろな質問をされたが、信士は「なにを思い出したか忘れました」とだけ言い、鈴木先生は困った顔をしていたが、なんとか退院にこぎつけた。

退院した信士はひたすらに走り込み、自分の力を上げていく。

そして、季節は冬へと近づいていく。

第68話 - Eagle -

「久し振りだな、お前が集会に来るのは3ヶ月振りぐらいじゃないか？」

ここはどこかの倉庫。

薄暗く、誰も近づかないところだ。

「そうですね」

「早速だが、今回お前を呼んだのは他でもない…」

「ついに、殺る時が来たんですね？」

「ああ、冬休みだ。それまでに例の物も輸入出来るはずだ。今まで観察イーグルご苦労だった、Eagle…」

「いえ…あんだけ近くにいれば、嫌でも様子が分かりますから。それにしても…学生だけってのは不便ですね。休みの日しか動けやしない」

Eagleと呼ばれた、少年は軽い笑みを浮かべながら言う。

「お前は俺を馬鹿にしているのか？大人達は信用できない！…何度も言っていることだろ？」

あー、そうだった。まあ、どっちでもいいさ。

少年はとりあえず「はい」と答える。

まあ、あんたのやることは面白かったからな、“成宮”さん…。

「全員、集まったか？じゃあ、今回の冬休みに実行する暗殺についての説明をする」

「そもそも、暗殺はもつと早くに行いたかったが、手違いにより夏休みのうちに例の物が届かなかったからだ」

「獲物は運良く、記憶を失っている。警察に守られる前に何としても捕らえるいいな？」

その場にいる全員が頷き、そろそろと出ていく。

その中の1人。いや、鷹谷中の生徒手帳をバッグに持つその少年には、暗殺よりもさらに、その先がすでに見えている。

Eagle…この少年がこれからなにをするかも、この少年が今、笑みを浮かべていることにも、誰も気づいてはいないのだった。

今、季節は12月。秋に行われた県大会は結局、鷹谷中から出たメンバー全員が地方大会へは進めなかった。

そして、この寒さが厳しくなってくる季節、練習メニューは体力的な練習が多い。

しかし、この冬でタイムを伸ばすと張り切る信士はこつこつと練習

をこなしていく。

退院してから、2ヶ月。体にはなんの支障もない。

しかし、気になるのは『成宮』という人物。その人物に逆らった？
なにをしたというんだろう。

でも、それよりも練習。信士にとって今、それ以上、大事なことはない。

「信士、とばしすぎだ！」

外周の途中、浩太が信士に言う。この外周も夏休みから成長した分、
今では15周は走るようになっていた。

「いいんだよ。これぐらいキツくしないと体力は上がらない…」

そんな、ハードな練習をそれからはずっと繰り返してさらに半月。

ついに、運命の冬休みが近づいてくる…。

そんなことも知らず、信士はただ、陸上のことを考えている。

それだけだと思っていたから。これからただ、中総体にだけすべ
てをかけようと決めていたから。

そう、この冬休みがおそらく人生でもっとも過酷なときになるなん
て、思ってもみなかったから…。

第69話・クリスマスの悲劇・

“お前は成宮さんに逆らった。死ぬ”

体が下へ吸い込まれていく。死ぬ……………

「うああー!!」

はあ……はあ……

夢か……。なんて目覚めの悪い夢だ。

冬休みに入って、2日目。今日は12月25日、クリスマスだ。

そのことを思い出し、嫌な夢のことを忘れ、クリスマスを楽しもうとドアを開ける。

廊下に出た瞬間、強烈な寒さが体を襲う。さすがに12月も後半になると寒さは厳しいものになっている。

「おはよう。起きるの早かったんじゃない？」

リビングに行くとう母さんがいた。時計をしてみる。6時30分。

確かに早く起きてしまったようだ。でも、あれだけ嫌な夢を見たんだ当たり前か。

朝食を食べ、練習へ向かう。クリスマスだというのに、部活はある

らしい。

でも、それぐらいしなければ勝てはしないだろう。

「ねえ、陸上部でクリスマス会しない？」

言い出したのは詩織。

「全員で？さすがに多すぎないか？」

疑問を唱えたのは浩太。

「うーん、じゃあ、二年生でやっちゃう？」

という詩織の言葉からクリスマス会は開かれることとなった。

信士にとってもクリスマスを楽しむにはとても面白そうだと楽しみに思う。

このクリスマス会でなにがおきるかなんてこのときは知らなかったから。

「せっかく陸上部なんだしさ、鬼ごっこしよー！」

近くの広い公園。練習後結局集められた陸上部の二年生達。その大半はこの寒さで乗り気ではなかった。

が、しかし、始まってしまえば関係なしに広い公園を陸上部メンバーが走り回る。

なんだかんだ言っても、始まって30分でみんな寒さすら感じていない様子。

しかし、楽しかったのはここまで。

「浩太、タッチ！」

「ああ！後ろから！！」

どうやら、浩太が不意をつかれて鬼になったようだ。

と、ここで浩太は

「信士、覚悟！！」

なぜか、信士だけを追い始める。

みんなは反対側に一斉に離れ、もはや見えないような位置に。

必死に逃げる信士。だが、やはり800を走る浩太には勢いの差でどんどん詰められていく。

「タッチ！！」

浩太が信士にタッチしようとしたこの瞬間。それと同時に凄まじい銃声が鳴り響いた。

銃弾は信士の肩をかすり、後ろへ。

一瞬の出来事。2人から離れていた、他のメンバー達は音にしか気

づいてはいない。

なんだ……。今、一体何が。

わけもわからず、銃弾がかすった肩を押さえる信士。

「と、とりあえず隠れるぞ！」

浩太がそうつと焦った声で言う。

信士の頭の中は何が起きたのかとただ、パニックに陥っていた。

第70話 - 銃声の後 -

なんだ…なんだよこれ…。

信士の左肩からは血が滲み出してきている。

隠れたまま、どれくらいたっただろう。全員、さっきの銃声でなに
もできない状態だった。

そんな中、やっと我に帰り、信士の左肩から大量に血が出ているこ
とに気づいた浩太がやっと声を発する。

「誰か、救急車呼んで!!」

「呼ぶって言ったってなんて言えばいいんだよ…撃たれたってか？
そんなの信じてもらえんのかよ…」

誰かがそう言う。確かに中学生が銃で撃たれたなんて信じてもらえ
ないかもしれない。

でも、今はそれどころじゃない。

「いいから!!」

浩太が苛立った声を出す。

「私、かける!!」

この声は詩織。確か、詩織は鈴木先生の電話番号を知っていたはず。

それなら、分かってくれるだろう。そう、信士は思った。

それから、5分後。救急車とパトカーが一緒に来た。

信士は救急車に急いで運ばれ、それ以外は警察にかくまわれる。

警察は周辺を隈無く捜したらしいが怪しい人物は見つからなかったらしい。

病室。左肩には包帯が巻かれている。

幸い、銃弾は本当にかすっただけだったらしく、軽傷ですんだ。

でも、問題は…。

「君はついに、奴らに気づかれた。それは、間違い事だ。分かるね？」

病室に取り調べに来た永井さん。そして、母さんも病室にいる。

「はい…」

Crowにぼくの居場所が気づかれた。それは、公園にいたときから分かってたことだ。

「君も嫌だと思うが、やはりこうなってしまった以上、君を引き

取らせてもらうしかない」

「理解してくれないか？」

「ぼくは…」

確かに警察の人にかくまってもらうべきなのは分かっている。

でも、ここで諦めたくない…。

これから中総体で水時と戦って、それ以外にもノエルとも柊君とも…。

それも全部、終わってしまうかもしれない…。

嫌だ…。

「ぼくは…」

嫌です。いつだったか、断ったようにそう言おうと思った。

でも、その時、母さんの悲しそうな顔が目に入ってきて、信士はそれをためらう。

『もし、命が狙われるようなことになったら、今度は永井さんに従って』

これも、いつだったか母さんとの約束。

信士はそのことを思い出し、俯いてしまう。

俯いたままの信士に、母さんは声をかける。

「信士、約束覚えてる？もう、止めて。これ以上は危ないの。だから…」

「だから…これ以上は危ない目に遭わないで…」

泣いてる…。

ぼくの為に泣いてるんだ。

もう、誰にも迷惑をかけたくない。そう思っていたのに、現にみんなを危険な目にあわせてしまっている…。

「…分かりました。お願いします」

もう、中総体までに戻れないかもしれない。それを考えると、涙が出そうになったが、信士はこう言うしかなかった。

第71話・誤算・

観念した様子の信士に一安心の永井。

母さんはやはり、ほつとはしているようだが、信士のことを思っ
てか、俯いたまま「ごめんね…ごめんね…」と繰り返している。

母さんはなんにも悪くないのに、悪いのはCrowなのに…。

「じゃあ、今日から君は警察でかくまわせてもらっよ。と言っても
肩の傷が治るまでは病院に居てもらっ」

永井さんは警察らしい言葉を続ける。

「それから…この病室は一般の人の出入りを禁止させてもらっ」

一般の人の出入りを禁止って…みんなとは完全に会えないってこと
か…。

「君は命を狙われている身なんだ。分かってくれ。そのかわりとは
言っではんだけどケータイは使っていいから」

「はい…」

ケータイで連絡をとれる分だけましに思えたが、会えないっていつ
までなのか分からないまま。

「それにしても、誤算だった…」

永井さんの呟きに信士は不思議な感じを覚えた。

「誤算ってなにがです…？」

「Crowが銃を手に入れていたことだ」

「前にCrowは学生だと言っただろう。今まで、実は殺人も銃を輸入する力もなかったはずだから…」

やはりな…。急に銃なんか手に入れたところで、人を狙って撃てる奴なんかいない。

かと言って、スナイパーを雇う金もないからな。こうなるのは、目に見えていた。

射殺に失敗した次の日、すぐさまCrowで集合がかけられる。

いつもの倉庫に向かう、『Eagle』。

全部、予想通りだった。後はことを進めるだけだ。

「昨日、殺し損なったことについてだが。おそらくもう警察にかくまわれてるはずだ」

「そこで、次の策だが……………」

ブウウブウウ

ケータイの音だ。病室での生活も3日目。

みんなとは、それなりに連絡もとれていたが、みんな信士になにかあることに気づき、少し気まずい連絡ばかりとっている。

名前を見ると、

『東條くん』

どうやら、メールのようだ。東條君からの連絡は久しぶり。なんだろうとメールの内容を試してみる。

『実は昨日、ついに水時が練習に復帰したんだ。まだ、本調子には程遠いけどね。』

それから、水時は今年の中総体。3000メートルに挑戦するらしい。

じゃあ、中総体でまた会おう』

水時は復活したんだ。なのにぼくは…。

悔しさからケータイを強く握り締めながら、メールの内容を何度も見る。

信士にとって、この『3000メートル』という文字はとてつもなく遠く感じられた。

第72話・オトリ・

水時は復活した…。なのに、ぼくは…。

きつと、このことがノエルに伝わればノエルも3000で言うだろう。

ぶつけようのない歯がゆさ。諦めきれない。いや、諦めたくない思いが信士の歯がゆさを大きくした。

その頃。

「どうするんだ…」

この日、起きた一つの事件に警察署では臨時会議が行われていた。

中学生を刃物で切りつけ、脅した高校生。

普通に聞けば一見警察署で臨時会議が開かれるほどの事件ではない。

しかし、問題は襲われた中学生が鷹谷中の生徒だったこと。それと脅しの内容である。

襲われた被害者は2人。2人はその時、鷹谷中のジャージを着ており、学校へ部活動をしに行く途中だったらしい。

そこへ突然現れた高校生ぐらいの若い男3人組はいきなり、刃物を

2人に突きつけ『左肩』を切りつけてきた。

そして、その後こう言ったという。

『警察に“伊達信士”を差し出せ。12月30日2時広山東公園と言え』と。

「30日って言ったら明後日だぞ。この時、少年を連れて行かなければまた、被害者が出る」

「一応…学校側は冬休み中の部活動を中止するそうですが…」

「これをチャンスと捉えるべきじゃないのか」

唐突に言い出した人物がいた。警察署所長である。

「この日で奴らを一気に捕まえる。おとりは二の次だ」

会議に参加していた者全員がこの人物に恐怖を覚えた。しかし、誰一人反論はできず、会議は終わった。

夜、薄暗い光のもと小説を読んでいた信士のもとへ強張った顔をした永井さんが来た。

「どうしたんですか？」

珍しくなかなか話し出さない永井さんに信士には嫌な予感が漂う。

「伊達君、お母さんも…落ち着いて聞いてくれますか…」

今、来たばかりの母さんも頷く。

「実は……………」

話を聞いた信士は言葉を失った。鷹谷中の生徒がCrowと思われる男達に襲われたこと。

冬休み中の部活動が中止になってしまったこと。

そして、伊達信士を差し出せとCrowが脅してきたこと。

ぼ…ぼくのせいだ。

ぼくが、早いうちから警察に引き取られてれば…。こんなことには…。

「それで…君がおとりになり、僕達、警察がCrowを捕まえる。これが、警察側の計画なんだ」

「今日は、その同意を伊達君とお母さんに頂きたくて来たんです…」

「ダメに決まっているでしょう!…」

母さんがすぐさま答える。

「それで、うちの子になにかあったらどうするんですか!…」

「…帰って下さい!うちの子をおとりなんかに使わせたくありません!…」

興奮した様子の母さんに永井さんは、

「…分かりました。また、明日来ます…」

そう言い残し、病室を出て行ってしまった。

第73話 - 償い -

「説得できなかっただと!？」

「はい…」

警察署に戻った永井。もう、時間は12時を過ぎている。こちらでは、作成の準備が着々と進んでいるようだ。

「いいか、今日だ!今日中に説得してこい!!」

「はい…」

説得か…。そんなこと言っても、自分の子を危険にあわせたくない親の考えも当たり前だし、伊達君もおとりになんかなりたくないに決まってる。

なんて、言えばいいんだよ…。

あの人がいれば…。伊達さんがいれば信士君になんて言ってあげられるんだろう。

温かいコーヒーを持ち、永井は綺麗に映る月を睨んだ。

ぼくは、なにをやっているんだ。

見つければこうなってしまうことぐらい分かってたはずなのに…。

ついに、みんなにとんでもない迷惑をかけてしまった。

バカだ。ぼくは本当に大バカ者だ。

この日の夜、信士はなかなか眠りにつくことができなかった。

次の日の朝。

「…おはようございます」

神妙な顔つきをした永井さんが深々と礼をし、病室に入ってきた。

しかし、それを遮るように母さんは、

「信士をおとりにはさせません。帰って下さい」

冷たい口調で言う。

「……………」

黙り、立ちすくんでしまっている永井さん。Crowが指定してきた日は明日。このまま帰れば永井さんもただでは済まないのだろう。

「さあ、帰って！」

永井さんを廊下へ押し出そうとする母さん。

ぼくは、このまま逃げるのか…？

迷惑のかけっぱなしでこのまま。

「待つて！」

気づいたら叫んでいた。そんなに離れてはいないのに…多分、散々迷ったせいだろう。

「永井さん、Crowが捕まればみんなのもとに戻れますか…？」

「あ、ああ…多分、リーダー格を捕まえればグループとしては潰れるだろう」

「“成宮”…これが、おそらくリーダー格の名前です…」

「成宮…？なぜそれを？」

「多分、記憶です…。今まで黙っててすみませんでした」

今まで言わなかったのは、自信がなかったから。…じゃない、それを打ち明ける勇気すら無かったから。

「ぼく、やります。早くCrowを捕まえて、みんなのもとに戻って、そして…謝るんです」

驚いた表情の母さん。

「なにを言ってるの？」と、心配そうに言ってくるがもう、変えられない。

今までにかけてきた迷惑を、ぼくは、命を賭けて償う。

「ほ、本当かい…?」

目にはうつすらと涙を浮かべ「絶対に君を守る」と、誓ってくれている。

絶対に生きて帰る。早く戻らなきゃいけない場所があるんだ。

生きて帰って、償わなきゃいけないことが沢山あるんだ。

だから、行かなきゃ…。

第74話 - 決意の朝に -

“ つらいときつらいと言えたらいいのにな ”

決意の朝に。iPodから流れる音楽に耳を傾けながら、信士は支度を始める。

全く…。今のぼくにぴったりの唄だ。

出発は午後1時。それまで過ごす時間は憂鬱だ。

怖い。寂しい。死にたくない。逃げ出したい。

そんな感情が信士の頭の中を行ったり来たりする。

でも、病室の外には警察官達が沢山立ちはだかっている。もう、病室は鳥小屋のようで…。

ふと、ケータイが目に入る。寂しい。その思いがこらえられなくなり。

『 さよなら

今日で最後になるかも しれないからさ

今までありがとう

そして迷惑かけてばっ

かりごめん』

メッセージを残し、送信ボタンを押す。

メールの宛先は浩太。送信ボタンを押してから約3秒ぐらいで『送信完了』と表示された。

「はあ…」と信士はため息をつく。そして、そのままベッドに倒れ込む。

永井さんから聞いた作戦をもう一度思い出す。

永井さんの運転する車に乗せられて広山東公園へ向かう。公園の周りは警察官達が見張っているらしい。

あとは、あつちの出方次第…。

横になっているうちに意識が遠くなり信士は眠りについた。

「信士」

この声は母さんだ。まだ眠い。おそらく、最近あまり眠れていなかったからだろう。

起き上がってみるとそこには永井さんもいた。

「そろそろ時間だ。行こうか」

時計を見ると12時45分。信士は永井についていく。

車の前。あと1時間程度でぼくは敵の前に立つことになる。

「信士」

また、母さんに名前を呼ばれた。母さんは泣きそうな顔を浮かべたまま立っている。

「大丈夫だよ」

本当は不安なくせに笑顔を作って、平気なふりして嘘をついた。

「そろそろ、行こう」

車に乗り込む信士。運転席には知らない人。助手席には永井さんが座っている。

車は走り出した。車内は静かだ。

車が走りだしてから少したったころ、信士はふとケータイを見てみた。

メール1件入ってる…。

多分、浩太からだろうと思う、開こうとした瞬間。

「バンッ」という鈍い音がしたかと思いきや、車は激しくスリップした。

それとほぼ同時に「伏せろ!!」という永井さんの声が聞こえる。

しかし、それよりも前に信士は見てしまった。

車の周りを多くの覆面を被った『やつら』に囲まれてしまっているのを…。

第75話・嘘だ・

「どうなってるんだ…」

ここは警察署。この警察署では慌ただしく警察官が出入りしていた。公園でCrowを一網打尽にする、はずだった今回の作戦。

しかし、その作戦は公園に送る途中の車を人気のない道で人数のほとんどを使って襲うという大胆な作戦によって…。

人数が少なかった護送部隊は、伊達信士はさらわれてしまった上に…伊達信士を守るうとした永井刑事は意識不明の重体…。

最悪の結果だった。

警察署の中で一番、頭を痛くしていたのは警察署所長の市原。

まさか、学生どもにこんな敗北を喫するとは…また、やつらを捕まえるチャンス逃してしまった。

これは警察署にとって大きな痛手であった。

「なんで…なんで…」

もう、警察にくってかかるのも疲れ果ててしまった、信士の母、久美子は泣きながら、しゃがみこんでしまっている。

Crowはどこに逃げたか分からない。

もう、あの少年は諦めるしかない。誰もがそう思ったとき、
警察署にあの人物が現れた。

「あ、あなたは……」

なんだ…？ここは…。

連れてこられたのは薄暗い倉庫。周りには多くの男達。

ああ…ここで、ぼくは死ぬんだ…。

まだ、なんにも成し遂げてないのにな…。

「おい」

大勢の中の1人に声をかけられた。

怯えながらも視線を返す信士。

「お前は、記憶を失ってるんだってな。じゃあ、あの日のことは覚えてないんだな？」

小さく頷く信士。

この人物が成宮…？

そんなことを思いながらも必死にその日のことを思いだそうとする。

その瞬間、目の前に銃が向けられた。

終わる…。

しかし、銃はすぐに下げられ、

「なんてな、安心しろ。殺しはしねえよ」

「!？」

「ただし、記憶を取り戻すまでは、こっちで拉致させてもらう」

助かった…？でも、なんで？思い出されるのはこの人達にとってま
ずいはず。

「お前を殺すのは惜しいからなあ」

「なんたつてお前は、Crowの元幹部なんだからな！」

「!」

嘘…だろ。まさか…そんなわけは…。

“お前は成宮さんに逆らった”

逆らったって、まさか…。

嘘だ。

嘘だ嘘だ嘘だ。
そんなの…。

「嘘だ…嘘だ…」

いきなり様子が急変した信士。よほど、ショックな様子。

「本当だ」

冷たく言い放たれた瞬間、信士はあまりのショックにより気を失っていた…。

「あ、あなたは、伊達さん!!」

1人の警官が言った先にはCrowについて追っていたはずの信士の父、伊達正信がいた。

「もう、やつらの足取りは掴んでいます。急いで準備お願いします」

「今度こそ、Crowを捉える準備を…」

第76話・帰ってきた伝説・

「今度こそ、Crowを捉える準備を…」

突然戻ってきた、伊達正信。信士が沼に落とされた時に助けた人物であり、Crowを追う上でいつでも最前線にいた。

しかし、このことにより常に危ない立場になり、ひとりで独自にCrowを追っていた。

「さっきの作戦の様子見させていただきました。なにをふざけているんですか？」

「あんなあからさまに逆をつかれて、いい加減にしてください」

「次…いや、最後のチャンス。これをものに出来ないなら警察は名だけのものです…」

その場にいた全員に向けて喋る正信。

この言葉により一人一人の顔が引き締まったように見える。

さすがだな…。

市原は感心するしかない。息子があんな状況にあったのに、やつらのあとを追い、戻ってくる冷静さ。

やはり、他のやつらとは違う。

「やつらのアジトと思われる場所は…」

頼もしい。

プルルル…プルルル…。ピッ！

“もしもし…Eagleです…”

「ああ、Eagleか…公衆電話からとは相変わらず堅いな」

“伊達信士は…?”

「お前に言われたようにして生かしておいた…。本当にこれでいいんだな？」

この時、Eagleが口元に軽い笑みを浮かべたのを電話越しの成宮が知るはずがない。

“そうですか…。成宮さん。今までありがとうございました”

「……………?急になんだ」

“いえ…、多分成宮さんと話すのはこれで最後だと思うので”

ガチャン！

プー…プー…

電話は突然切られた。
最後…？まさか！？

「突撃！！」

沢山の警官達に既に囲まれていたことに気づかなかった、Crow。
倉庫になだれ込んでくる警察官の前に成す術もない。

クソ…。なんでだ。何故、場所が分かった？いや、それ以前にEagle…。あいつは最初からこれが狙いで…。はめられた…。

「ちくしょおおお！！」

「先生！信士は！？」

気を失った状態で救出された信士はそのまま病院に運ばれていた。

「特に傷ありませんし、大丈夫ですよ。そのうち目を覚ますと思います」

答える鈴木先生。信士の母、久美子はほっと胸をなで下ろす。

「…ありがとうございます……」

「それでは…、今日は夜遅いですから帰って下さい。信士君は大丈夫です。」

「…はい、ありがとうございます」

軽く会釈をし、帰っていく久美子。その姿を見送り、鈴木はもう一度、信士のいる病院に入ってみる。

と、信士の姿を見た鈴木は驚いた。信士は既に目を覚ましていたのだ。

「大丈夫かい？信士君」

軽く声をかけてみる。そして、鈴木が近づこうとしたそのとき、

「…こ、こないで……それ以上、近づかないで!!」

目から涙を流し、怯えるように信士は震えていた。

第77話・恐怖心・

…な、なんだ!?

信士の様子に戸惑う鈴木。まさか…また、記憶を失った…? いや、この症状は違う。

なら、これは…?

「…こないで…こないで………」

うずくまり、震えている信士。

「…大丈夫だよ。Crowは捕まったし、もう………」

…Crow………?

「うあああああ!」

「信士君!」

急に叫びだし、荒い呼吸をする信士に鈴木は慌てて駆け寄る。

「…嫌だ……嫌だ! あ…ああ……ぼ…ぼくは………」

「お前が成宮か…。学生なんか集ってなんのつもりだったんだ?」

Crowが取り押さえられた夜。すぐに取り調べが行われていた。

「あんたら大人には分かりやしねーよ」

「んだとー!」

警察はてこずっていた。取り調べにたいしてCrowの学生達は全員だんまりを決め込んできたからだ。捕まえた学生達は大体は高校生と大学生。しかし、中学生が多少いたことに警察ではとくに驚いた。

そして、この成宮は高校二年生。

なんなんだ、こいつらは。と、警察が頭を悩ませていたとき。トンとドアを叩く音が聞こえてきた。

「なんだ？」

「今、病院から連絡がありました………」

「なんだとー!？」

「おい……お前、なにをした……?」

「何って、なんだよ」

とぼけたような声で答える、成宮。

「伊達信士になにをしたと聞いているんだー!」

「…クツクツクツ……………」

不気味に笑い出す、成宮。その姿をみて警察官たちは軽く恐怖を覚える。

「なにをしたって…？別に本当のことを言っただけだけど？お前はオレ達の仲間、Crowのメンバーだってな」

そのあとも笑い続ける成宮の姿に警察官たちはその言葉の意味に気づくのに時間がかかった。

なんだと…？

伊達さんの息子がCrowのメンバー！？

「…で、でまかせを言っな！」

「嘘じゃあ、ねえよ」

口元を笑わせながら、言う成宮の言葉に警察内では間に受ける者も出ていた。

『最後かも』ってなんだよ。そして、なんで返信してくれねんだ。信士…。

次の日の朝。昨日、信士から来たメールを見ながら頭を悩ませる浩太。

あの日から信士には一度も会っていない。いや、会えないらしい。

なんで今まで黙ってたんだともふざけんなとも思った。でも、すぐに気づいた。信士の方が辛い思いをしてるんだってことに。

そして、昨日のこのメール。もっと、信士の辛さが分かった。

信士なら、あの銃声にみんなを巻き込んでしまったこと。鷹谷中の生徒が襲われてしまったことに責任感じてるに決まってる。信士はなにも悪い事はしてないのに…。

くっそ！やっぱり、ふざけんな！！

浩太は自転車に飛び乗り、漕ぎ出した。

第78話・過去と現在・

「鈴木先生！どうゆうことなんですか！？信士は大丈夫だって…」

連絡を聞き、病院に駆けつけた信士の母、久美子。

「言いにくいことなんですが…信士君は…、記憶を失う前、Crowの仲間だったんだと言われて…、そのショックから精神が不安定になってしまっているんです」

「そんな…信士がCrowの仲間だったなんて、そんなはずありません！！」

「…分かっていきます。しかし、警察が取り調べをしているんですが、嘘を認めなくて…。嘘だと解れば治まると思うんですが…」

「そんな…」

せつかく…せつかく、Crowが捕まって、お父さんが帰ってきて、また、3人で暮らせると思ったのに…。

「病室に入れさせて下さい！！」

「今、入っても無駄です！！」

止める鈴木をはねのけ、無理やり病室に入り込む。そこには、ベッドの端に体育座りでうずくまっている信士の姿があった。

「信士…」

近づこうとする久美子。しかし、信士は怯えた目を久美子に向け、

「来ないで…来ないで!!」

鈴木先生のとくと同じように、人が近づくことを避けている。

「大丈夫…大丈夫だから信士…」

「来ないで!ぼくは、Crowの仲間だったんだ!ぼくは…悪人なんだ…ううう…うあああ!」

涙を流し暴れ出した信士。急変した信士の姿に同様に隠せない久美子。

「信士君!!」

暴れる信士を抑える鈴木先生の姿をただ、見ているしかないのだった。

「はあ…はあ…、やっと着いた…」

「ねえ…浩太、信士からきたメール、もう一度、見せてくれる?」

自転車を飛ばして信士がいる病院まできた、浩太。その途中、詩織の家にも行き、詩織も一緒にきていた。

ケータイを覗き込み、メールを真剣な眼差しで何度も読む詩織。

「お前…、何回そのメール見てんだよ？そのメール、送ろうか？」

もう、これが4回目。いい加減、浩太にとっても、いちいち同じメールを開くのもめんどくさくなってくる。

「あ。いや、いいの。ただね…記憶を失う前の信士もこんなふうに苦しんでいたこともあったのになって…」

うつむき加減に言う。

「お前さ、いつまでも記憶を失う前の信士のことばっか気にしてねえで今の信士のこと考えろよ。……つつつてもキツいのは分かるよ。丁度、記憶を失う前の日だったもんな…」

「…分かってるよ。分かってるけど、私は待ってるの。記憶を取り戻して、あの事を思い出してくれるのを…」

病院を見ながら、詩織は答える。

だから…だから、今までも陰で信士を助けてきたんだろ。

夏休み明けのクラスメイトの接し方だって、秋の大会の前するとき、俊哉に頼んで負けてもらったことだって…。

そんぐらい、オレにだって分かってんだよ。

「行くぞ。こんなメール信士が送ってくるなんてよっぼどだ」

「...
うん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4346p/>

記憶のないランナー

2011年4月15日20時01分発行